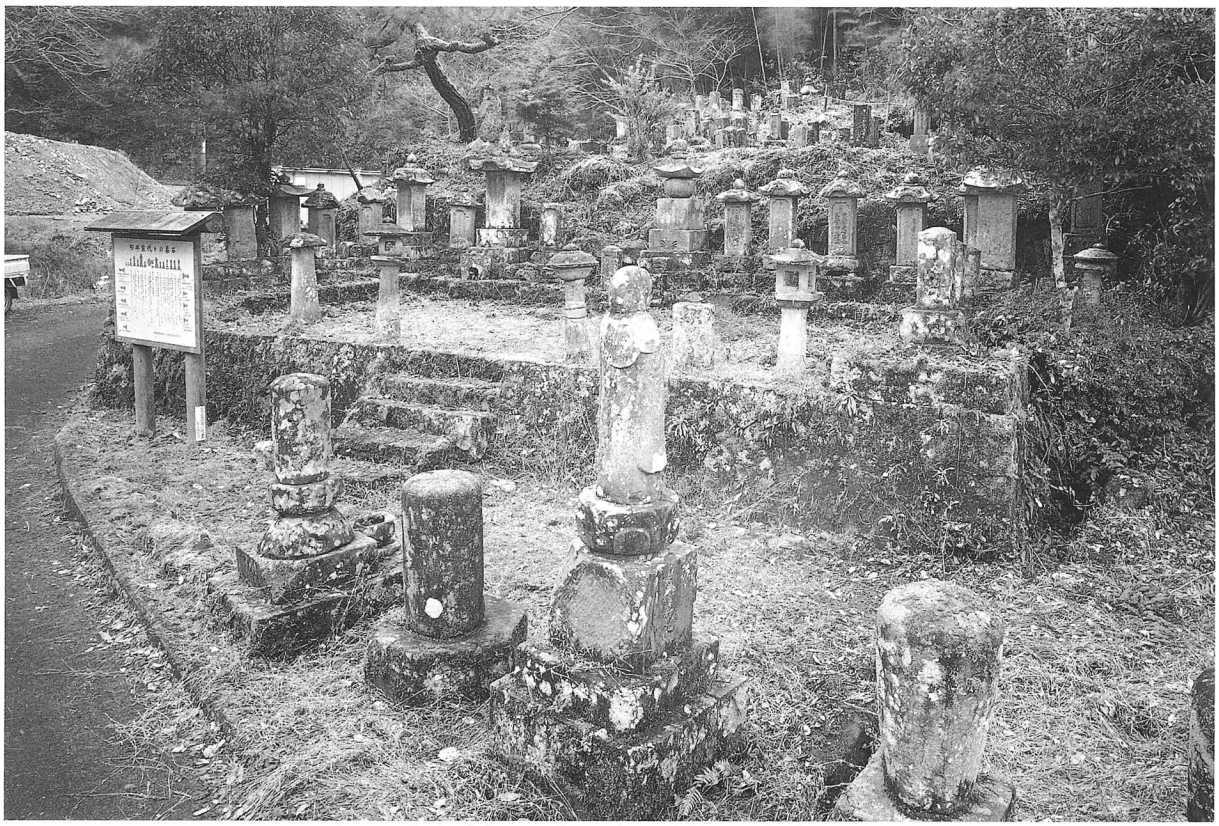


写真 83　智光院墓地　全景（櫻井家墓地の奥がＢ～Ｇ群）

写真 84　智光院墓地Ｃ群（西から）

写真 85　水丸子山墓地　A群（西から）

写真 86　水丸子山墓地　B群（東から）

写真 87　水丸子山陵線上の集石遺構

写真 88　155. 形態A

写真 89　195. 形態B

写真 90　190. 形態C　戒名「鑪屋了鉄信士」

写真 91　208. 形態D

第3節　金屋子神社と智光院境内の石造物

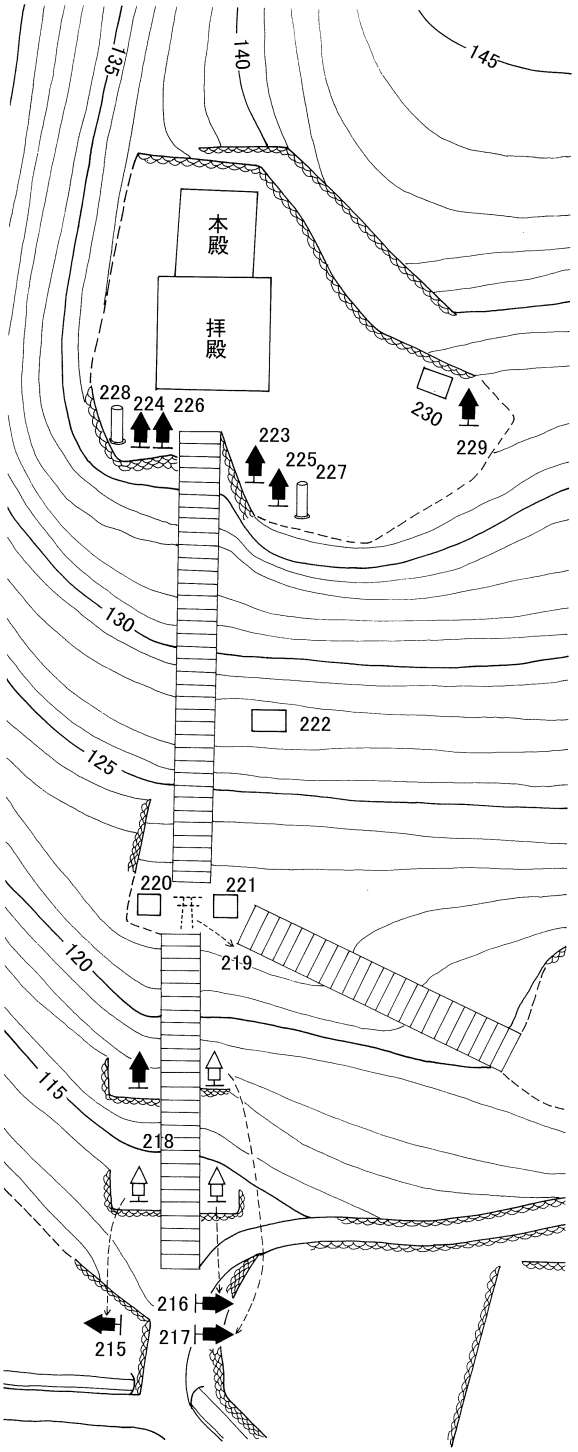
1．金屋子神社境内の石造物

宮本鍛冶屋跡には金屋子神社があり、現在も地元有志によって祭礼が奉仕され維持されている。冶金の神である金山彦命、金山姫命を祭るこの神社は、棟札の調査により元文元(1736)年、4代宗兵衛清矩によって当地に勧請造立されたと考えられている[9]。本殿はその後天保15(1844)年に11代運右衛門によって造替され現在に至る。

境内に残る石造物で最も古いのは、228の鳥居基部とみられる砂岩質石柱で、安永5(1776)年に5代甚三郎順之お抱えの鍛冶屋中が願主となって寄進したものである。この1点以外はいずれも19世紀に下る。正徳5(1715)年に櫻井家が多伎藝神社に寄進した鳥居が金屋子神社に持ち帰られたとされているが、現在は残されていない。227の花崗岩の石柱に「奉寄進　雷大明神御□□〔鳥居カ〕」とあることから、これが鳥居の柱（竿部）とみられる。なお、金屋子神社参道中段付近にはもう一つ鳥居がある。219の花崗岩製のもので、嘉永5(1852)年に11代運右衛門直順が奉納したものである。現在は倒壊し、柱と笠木が参道脇に積まれている。

現在境内に立つ石造物は、大半が10代多四郎直敬と11代運右衛門直順の代に寄進されたものである。この時期社殿が荘厳されただけでなく、参道石段や灯籠、唐獅子などの威儀具や錨太鼓など祭具も多く奉納され、現在みるような境内景観に整備されたものとみられる。製鉄業者の崇敬する金屋子社を篤く信仰し祀った様子がうかがえる。櫻井家当主だけではなく、お抱えの従事者が奉納したものが多い点も注目される。なお拝殿だけは新しく、昭和31年の建立である。

境内石造物のなかで特に注目されるのは218の来待石小灯籠で、「松江石工　幸八」の工人銘が記される。松江の石工幸八は湖陵町三部八幡宮にある灯籠、玉湯町金毘羅宮の不動明王像に名を刻んだ石工として報告され



第25図　金屋子神社 石造物配置図(1/300)

ており、石工銘を残すことが許された数少ない名工ではないか、と推測される人物である[10]。本例は小灯籠で竿部以下しか残らないが、台石上辺に葵葉文を配した細工の細かい優品である。平成15年冬ごろまでは石段脇の灯籠座に正立していたが、その後石組が崩れ倒壊してしまったのは残念である。

この他には225、226の灯籠が石見地方に広く流通する温泉津産福光石製で注目される。多伎町内の神社石造物では、石見と接しながらも出雲の来待石製品が圧倒的に多く、石見寄りの多伎藝神社と当社を除けば他に福光石製灯籠が無いという状況である。

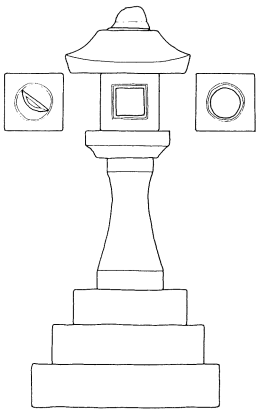
2．智光院境内の石造物

智光院には墓と地蔵以外の石造物が少なく、本堂正面に灯籠1対があるだけである。これは天保14(1843)年に11代運右衛門直順と、口田儀町の船頭たちがともに寄進したものである。興味深いのは運右衛門の名を刻む134には「為麗光院」と古い寺号があること、船頭中が寄進した135に「為櫻井先祖代々供養」とあり、櫻井家の産鉄流通に恩恵を受けた船頭が櫻井家先祖の菩提をなしている点である。

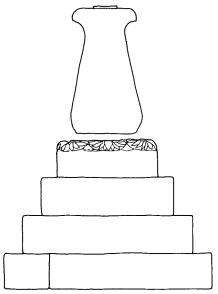
3．櫻井家の社寺への寄進活動

櫻井家は社寺への崇敬篤く、特に経営が順調で拡大、最盛期にあたる10代多四郎直敬と11代運右衛門直順の代には盛んに社寺への喜捨、寄進行為が行われている。その対象は宮本の山内にとどまらず、田儀村の氏神であり海運業者から信仰のあった口田儀多伎藝神社にも向けられている。

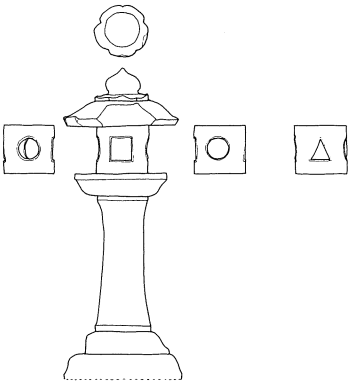
多伎藝神社には、現在文政7(1824)年に10代多四郎が奉納した花崗岩製鳥居と、年不詳の灯籠1基がある。灯籠は右柱に「奉寄進　雷大明神御鳥居　願主　櫻井紋三郎明重　再建　同苗多四郎藤原敬重　同苗倅　善太郎藤原□□」、右柱に「正徳五未年八月吉日　再建文政七年甲申六月十五日　神主高橋大膳源唯貞敬白　石工三刀屋幸助」と銘がある。正徳5(1715)年に櫻井紋三郎明重が寄進した鳥居を、文政7(1824)年に多四郎が再建して現在に至ることがわかる。この鳥居で興味深いのは「石工三刀屋幸助」の石工銘がある点で、花崗岩を産出し広く流通したと考えられている飯石郡三刀屋産製品の確実な例である。花崗岩製鳥居は出雲地方に多くみられ三刀屋産である可能性があるが、産地が銘文に刻まれる例は少ないため本例は貴重といえる[11]。



134. 智光院参道
天保14(1843)年
11代運右衛門寄進



218. 金屋子神社参道
元治元(1864)年
松江石工幸八



229. 金屋子神社境内
福光石製

第26図　神社・寺院の灯籠(1/30)

第 32 表　智光院・金屋子神社境内石造物一覧表

番号	種別	西暦	和暦	銘文	石材	特記事項
134	参道燈籠(左)	1843	天保14	(正面)奉寄進　天宝十四年卯九月二十八日 (左)為麗光院 (背面)櫻井運右衛門		
135	参道燈籠(右)	1843	天保14	(正面)奉寄進　天保十四年卯九月四日 (右)為櫻井先祖代々菩提 (背面)口田儀町船頭中		
136	地蔵					
137	一畑薬師	1868	慶應4	(正面)一畑薬師　慶應四年戊辰六月日 世話人才□		
215	灯籠(右)					台座を残す
216	灯籠(左)			(正面)獻燈　(右)大野□□　塩田□□		台座を除き参道入口脇に転落
217	灯籠(右)	1864	元治1	(正面)元治元甲子五月　(左)木村治郎右衛門	来待石	竿のみ、参道入口脇に転落
218	灯籠(左)	1864	元治1	(正面)奉献　(右)勝部禮吉郎　(左)松江 石工 幸八　(裏)元治元甲子五月吉日	来待石	
219	鳥居	1852	嘉永5	(柱)嘉永五年壬子五月吉日　奉再建 直重十一世裔 櫻井運右衛門 源直□	花崗岩	倒壊、柱と笠木の部分が残る
220	唐獅子(右)	1843	天保14	天保十四癸卯七月十□日	来待石	
221	唐獅子(左)				来待石	
222	手水鉢	1828	文政11	(正面)奉献　文政十一年戊子正月吉日		
223	灯籠(右)			(正面)櫻井運右衛エ直順	福光石	
224	灯籠(左)			(正面)櫻井運右衛エ直順	福光石	
225	灯籠(右)	1814	文化11	(正面)奉献　源三郎 庄助 弥蔵　(右)文化十一甲戌正月吉日	福光石	
226	灯籠(左)	1814	文化11	(正面)奉献　廣助 為□□　杢兵衛　(右)文化十一甲戌正月吉日	福光石	
227	石柱			奉寄進　雷大明神御□□	花崗岩	鳥居柱の転用か、左側
228	石柱	1776	安永5	櫻井甚三郎□永抱仕　願主 鍛冶屋中　安永五申三月日	来待石	鳥居柱の転用か、境内右側
229	灯籠				福光石	
230	石屋				福光石	

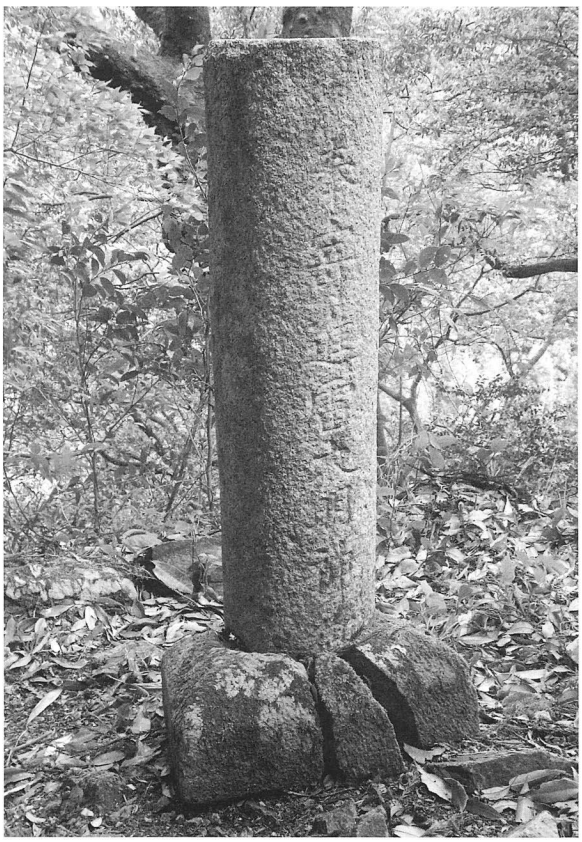


写真 92　金屋子神社　227

写真 93　同左　228

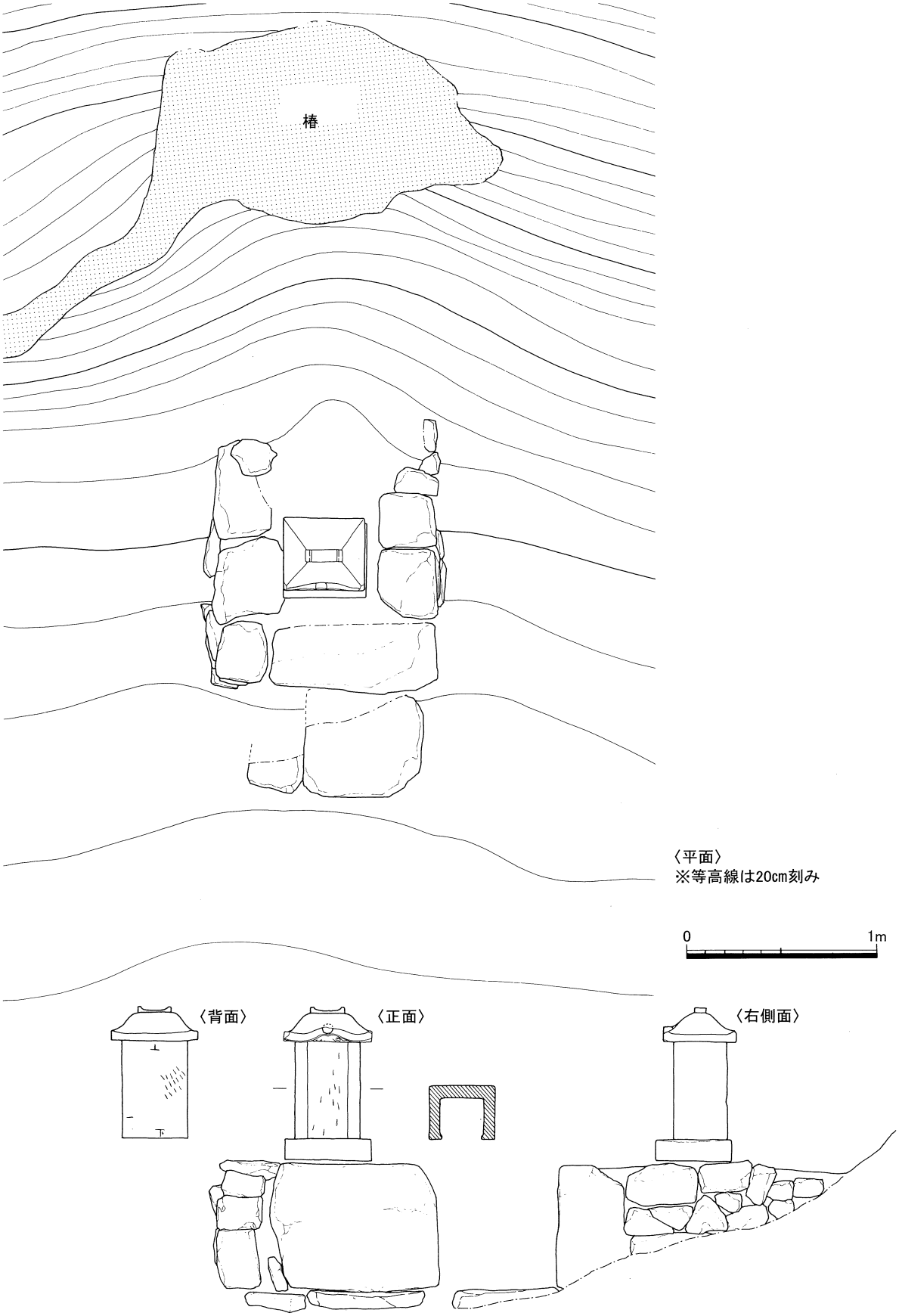
第４節　聖谷たたら跡の地蔵石龕

聖谷たたら跡は多伎町大字小田字上頭名聖谷にある製鉄関連遺跡である。位置を第９章第23図に示しているとおり、屋敷谷を経て宮本鍛冶屋跡へとつながっている。両者は道のりにして3.5kmほどの距離にある。この遺跡については今回の調査で踏査し、40m×100m程度の範囲をもつことが確認された。採集された鉄滓の特徴から、付近では小規模な銑を主体としたたたら製鉄が操業されていたとみられる。

この聖谷たたら跡には、享保19(1734)年に田儀櫻井家４代当主である宗兵衛清矩が造立した地蔵１体が置かれていた。地蔵は石組基壇の上に組まれた石龕の中に安置されていたもので、非常に丁寧に扱われている。この地蔵は昭和10年代に管理上の理由から上頭名の屋敷地内に移され、さらに昭和48年７月、町内高木の佐々木幸男氏宅へ移された[12]。現在は佐々木氏宅邸内に新たに地蔵堂が建立され、その中に安置されて丁重にまつられている。

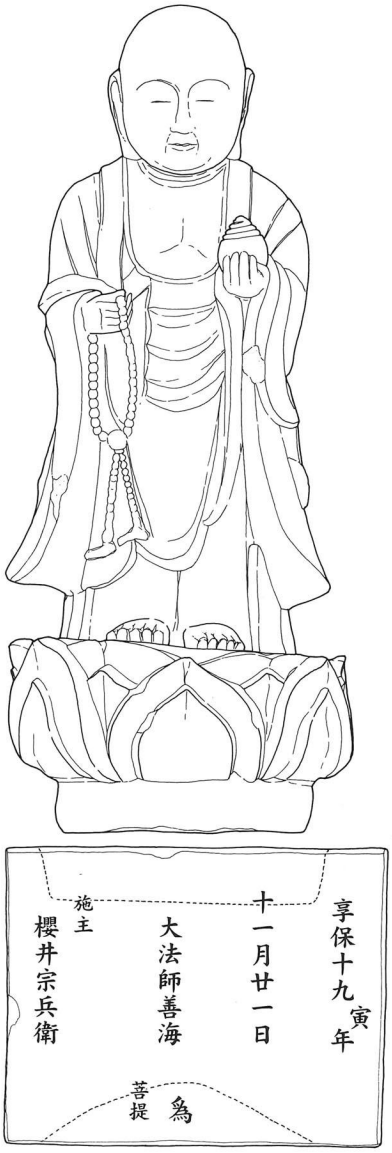
したがって聖谷たたら現地に地蔵自身は無いものの、それが入っていた石龕は残されている。実測図を第27図に示した。幅７m、奥行き４mほどの平坦面が作られ、その奥斜面際に石組基壇が設けられる。前壁を構成する石は60cm×90cmと非常に大きく、その他はやや小ぶりの自然角礫が積まれている。また正面には薄く平坦な踏石が置かれている。この基壇中央に石龕が置かれている。高さ66cm、幅34cm。内部床面から笠下端までの高さ51cm。身の部分は一石からくりぬいたものだが、現在は左側面が折れて傾いている。笠の内側、すなわち天井部は高さ12cm程度削り込まれており、地蔵の頭部は６cmほどこの空間に納まっている。

地蔵自身は風雨にさらされることが無かったために極めて状態が良く、270年も経過しているとは思えないほどである。石材は福光石で、台石高さ16cm、ホゾを除いた地蔵の全高41cm。左手に宝珠をささげ、右手に数珠を持つ。数珠のあたりは赤い顔料が残存しているが、どの段階のものかは不明。台石には中央に「大法師善海」の菩提をなすと刻まれ、施主として櫻井宗兵衛の名があがる。大法師善海は仏僧であるが、どのような来歴の人物かは今回明らかにできなかった。したがって、どのような関係を背景にこの場所へ地蔵が造立されたのかは全く知る由が無いが、田儀櫻井家の当主が直接施主となり、このように立派な基壇をもつ地蔵を墓地でもない場所に立てている以上、田儀櫻井家がこの聖谷たたらを直接経営していた可能性は高い。この時期、櫻井家の具体的な操業内容について不明な点が多く、聖谷のたたらを記した史料もない。このような銑鉄をねらった小規模な操業が当時の実相であったとすると、具体的な資料を得ることのできる貴重な手がかりといえる。



第 27 図　聖谷たたら跡 地蔵石龕実測図 (1/30)

写真 94　聖谷たたら跡の地蔵



第 28 図　地蔵実測図 (1/4)

写真 95　聖谷たたら跡の地蔵石龕

まとめ

以上冗長になったが、石造物資料から読み取れる事柄を述べてきた。ここであらためて要点を整理する。

当主である櫻井家墓地については、祖とされる三郎左衛門直重と初代幸左衛門直春の当初の墓は広島県高野町本誓寺にあり、現在立てられているものは後世立てられたものである。また三郎左衛門直重については、櫻井家墓地の域外に置かれている六角座に乗った円塔が古い段階での追善供養等とみられる。上記の点から、分家して創業する時期には奥田儀は菩提寺が整備されるような状況でなく、あくまで仁多上阿井村に本拠がある、という認識がみてとれる。墓塔が大型化して一定の格式に画一化されるのは５代以降で、さらに戒名院号などにも有力鉄師である櫻井家当主としての格式が保たれるようになる。さらに大型化するのは10代、11代の時期で、これは当然ながら鉄山業の盛行を背景にしている訳だが、本家である仁多櫻井家の墓塔と比較すると明らかに小さく、その差は歴然としている。櫻井家墓地が現在のような姿に整えられたのは、11代による19世紀中ごろの事業で、このとき墓塔はすべて再配列されたと思われる。問題になるのはそれ以前、さらに智光院が勧請される文政4(1821)年以前の景観で、現寺域がそれ以前どのような機能をもっていたかが不明である。

山内の集団墓地では階層分化がみられず、規模や形態が画一的であった。山内での従事者墓の造立が認められるのは1740年以降で、それ以前の墓のありかたは明確でない。これは智光院過去帳との齟齬の問題にも関連する。墓からみた山内での死没者数が増加するのは1840～80年までの約50年間で、これは10代、11代による経営拡大、山内への労働力の流入に対応している。

【 註 】

（1）相良英輔2002「櫻井家の系譜」『櫻井家住宅調査報告書』仁多町教育委員会

（2）ただし、同時期の山内一般従事者の墓とは明確な格差がある。山内従事者の墓塔はすべて笠のつかない角塔で、台石1段が通有である。

（3）前述した塔身の奥行き/身幅の比率からみても、26が3より古いことが首肯される。3が当初の墓塔とすると型式、規模にヒアタスが生じる。

（4）形態の特徴も画一的である。ただし9代祖左衛門のものだけは擬宝珠、向拝飾り、蓮華飾が省略されたやや簡略なものである。

（5）屋形遺跡で確認されているように、屋敷地縁辺に少数の墓塔を立てる例はわずかにある。このような事例は詳細な踏査によって今後増加する可能性はあるが、現時点では他で確認されていない。
多伎町教育委員会2004『屋形遺跡　林道宮本聖谷線開設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』

（6）本書第３章、鳥谷報文参照

（7）「維持明治第十四年改正　旧来檀家過去諸霊簿　二」多伎町文化伝習館寄託

（8）大須地区の踏査は今回おこなっていないため、今後の課題である。

（9）本書第６章、和田報文参照

（10）勝部衛2000「玉湯町内における石工名のある来待石石造物について」『来待ストーン研究３』
西尾克己他2002「湖陵町の神社石造物の調査について」『来待ストーン研究４』

（11）この鳥居については別稿でも紹介している。　拙稿2004「多伎町の近世石造物」『来待ストーン研究５』

（12）佐々木幸男氏のご教示による。

第９章　周辺製鉄関連遺跡の踏査

田中義昭・西尾克己・原田敏照・阿部智子

第１節　遺跡調査の経緯

宮本鍛冶屋跡をはじめ、多伎町内山間部には谷筋沿いに製鉄関連の遺跡が点在している。これらの分布や性格、さらには櫻井家の経営との関わりなどの把握を目的に、分布調査を平成15(2003)年12月より平成16(2004)年5月まで実施した。昭和57年度の生産遺跡分布調査[1]によって周知の遺跡となっている９箇所と、今回新たに確認した１箇所を踏査し（第29図）、石垣や平坦面など残存遺構の地形略測と鉄滓など製鉄関連遺物の採取を行った。

また、３月17日に、櫻井家が経営していた簸川郡佐田町一窪田の加賀谷たたら跡の確認調査も併せて行った。

以下、調査実施日・調査地と調査参加者(50音順)を列記しておく。（西尾）

（1）平成15(2003)年12月6日（小田、奥田儀地区）柳楽仁司、原田敏照、三原順子、森脇悦朗

（２）同年12月28日（小田、奥田儀地区）浅沼政誌、石飛　赳、田中正實、田中廸亮、田中義昭、鳥屋原敏夫、内藤雅超、柳楽仁司、西尾克己、原田敏照、松尾充晶、三原順子、森脇悦朗

（３）平成16(2004)年1月6日（小田地区）柳楽仁司、原田敏照、三原順子

（４）同年1月28日（小田、奥田儀地区）石飛　赳、田中正實、田中廸亮、田中義昭、鳥屋原敏夫，内藤雅超、柳楽仁司、西尾克己、松尾充晶、三原順子、森脇悦朗

（５）同年３月17日（佐田町一窪田地区）浅沼政誌、田中義昭、三原順子、和田嘉宥

（６）同年５月８日（小田、奥田儀地区）阿部智子、西尾克己、原田敏照

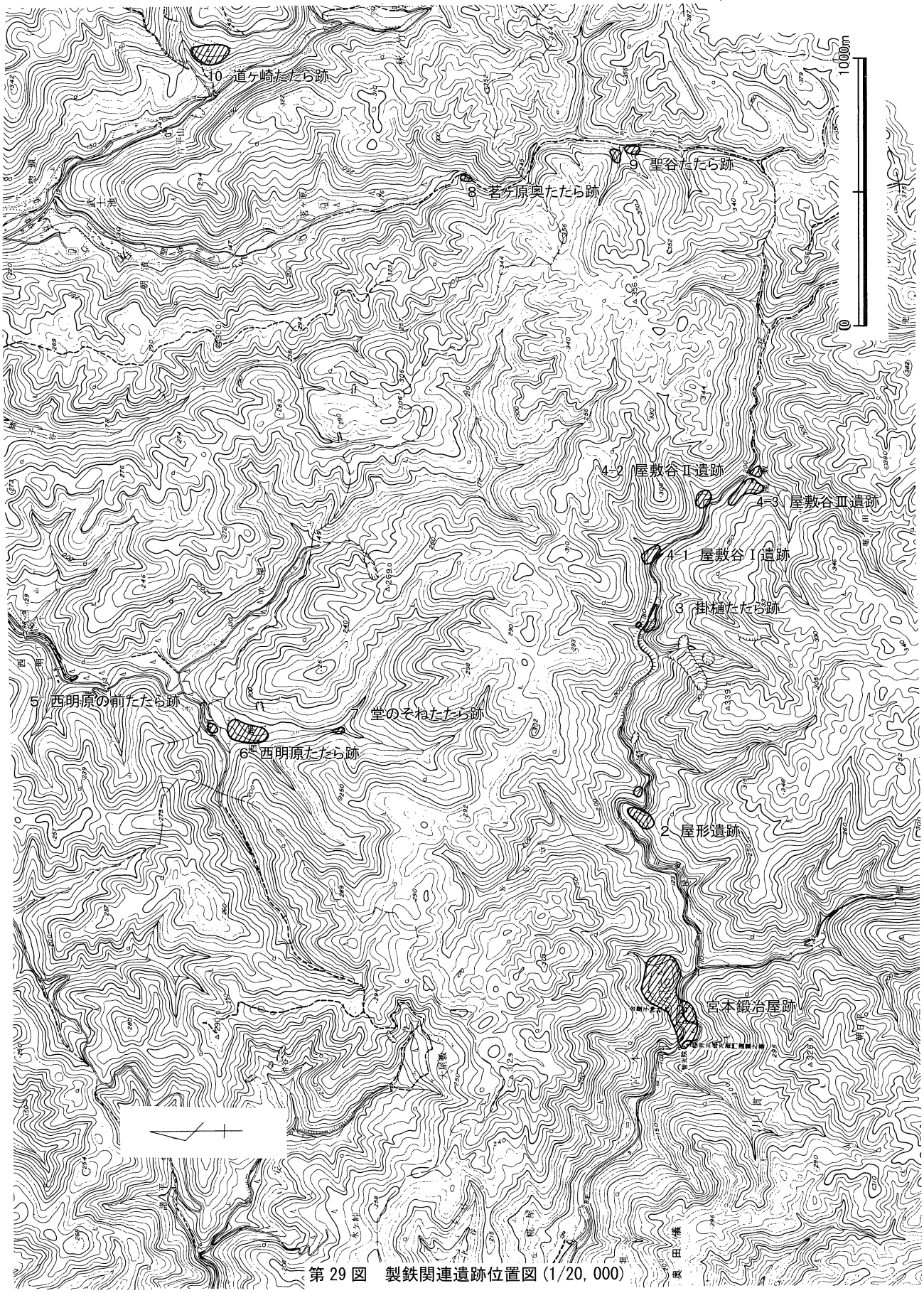
第２節　周辺の製鉄関連遺跡

１．越堂たたら跡

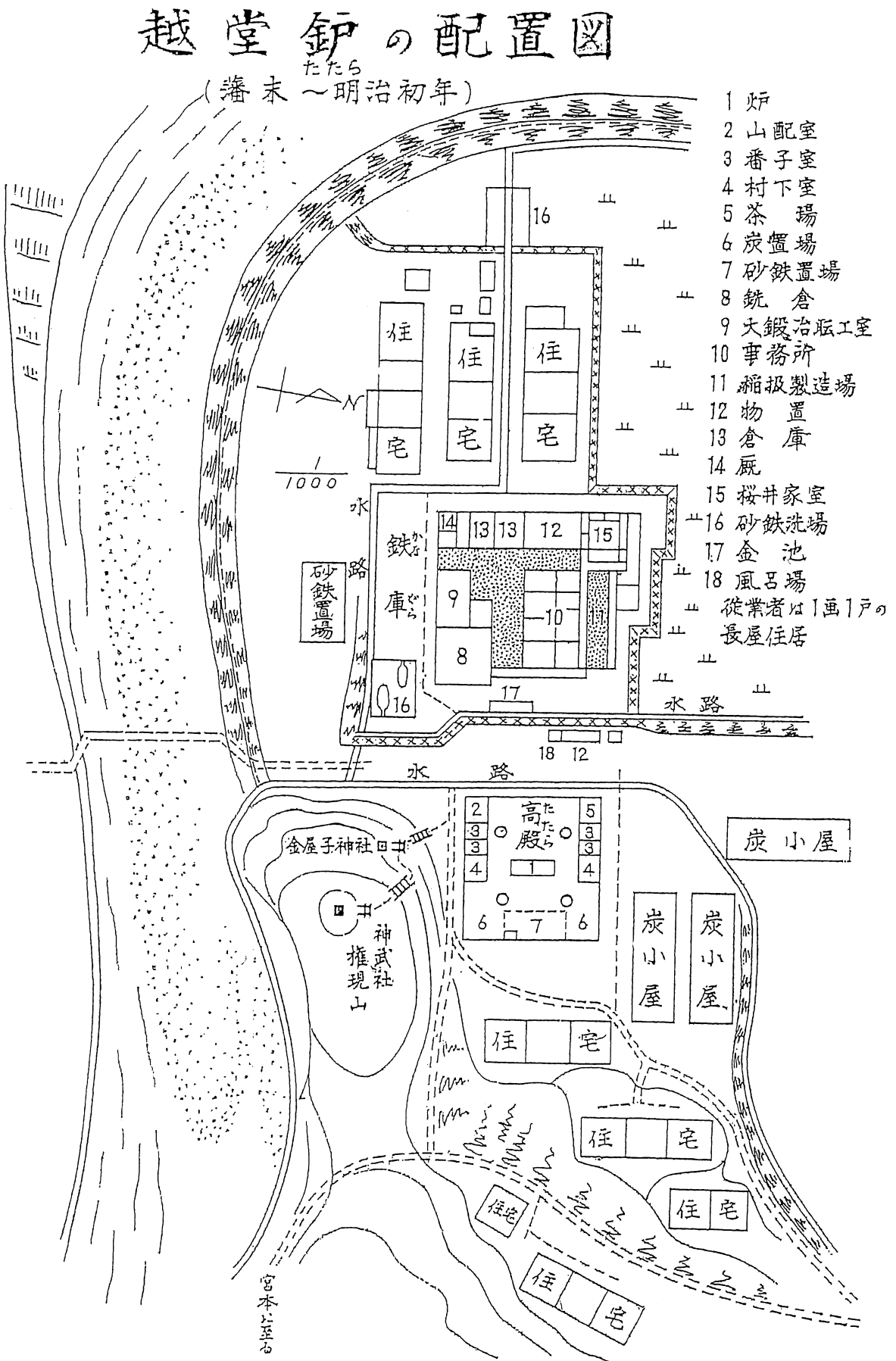
所在地：多伎町口田儀字越堂

立地・範囲：田儀川の河口から約１ｋｍ溯った右岸の平坦部（東西約130m、南北約200m、標高13.0m前後。低位段丘面か）にある。当該箇所は田儀川が大きく「U」状に蛇行しており、この蛇行部、すなわち「U」字形の内側に鉄生産とそれに関連する諸施設が置かれていたとされる（『田儀村誌』[2]。以下、同『村誌』により記述）。その範囲（たたら跡及び山内集落域）は東西約120m、南北約60m程度と思われる。現在は、この区域の中程を国道９号が走り、施設跡を分断する形となっている。

遺跡の構造と時期：現状で所在が確認できるのは南東部の川岸に残る低い丘（「権現山」）斜面に祀られた金屋子神社のみである。『村誌』の配置見取り図によると旧は西向きに半島状に張り出した山丘の先端部を削平して平坦地を造成し、そこに諸施設を造立しものと思われる。金屋子神社は削り残しの丘の先端斜面に建立され、その直下に高殿とされる建物が設置されたようである。高殿の北・北東部には３棟、東側には、おそらく従業者の住宅であろう建物（長屋風）が５棟記されている。高殿の真西には一段低い平坦部があり、ここには銑倉、大鍛冶職工室、事務所、厩、砂鉄洗場、金池、砂鉄置場、風呂場等の建物が略方形状に建ち並び、これら建物群内に櫻井家の居住宅もあったとしている。さらに、



第29図　製鉄関連遺跡位置図（1/20,000）



第30図　越堂たたら跡　建物配置図（『田儀村誌』[2]より）

この方形区西側には３棟の従業者住宅と砂鉄置場が建てられていたと記している。

以上が『村誌』から読み取れる諸施設の配置であるが、その記載は明瞭であり、時期は「幕末～明治初年」の頃とされていることから信憑性もかなり高いとみてよいのではなかろうか。なお、一帯では鉄滓を採集できる。

まとめ：越堂たたらの操業は18世紀後葉に溯るという。『村誌』の記載図は幕末～明治初のものとされ、その終焉期が明治初期にあったことを知る。該図に「砂鉄洗場」が記されていることや海浜近くに立地するたたらであることなどから、浜砂鉄を使用した「高殿たたら」であることが推定される。もっとも操業当初から浜砂鉄に依存したか否かは不明。また、「銑倉」とか「大鍛冶職工室」とあるので、「高殿」・「銑」→「大鍛冶」・「割り鉄」の工程が１箇所で行なわれたことも考えられるが、いずれにしても発掘調査等による実態の確認が必要であろう。本遺跡は田儀櫻井家の鉄生産本拠地とされる宮本地区の遺跡群との対比において重要性を有するといえる。

（田中）

写真 96　越堂たたら周辺（南東から望む）

写真 97　権現山の石造物

２．屋形遺跡

所在地：多伎町大字奥田儀467-8外

立地・範囲：田儀川支流の宮本川が上流で二つに分かれるうちの東側、屋敷川が丘陵によって大きくカーブする、その丘陵上に位置する。

現地は最近まで個人所有の保安林であった。明治末頃に[3]杉、檜が植林されて、森林関係者の入山はあるものの深い草木に覆われていた。

尾根が南部に寄り北部に向かって比較的なだらかな斜面であったのを、掘削し三段の平坦面を造成している。幅東西約30m、奥行き南北約100mである。

この遺跡は林道宮本聖谷線開設工事予定地内にあり、平成16（2004）年4～6月に発掘調査がおこなわれた。調査対象は、北部先端の約100㎡と対岸の丘陵上の約300㎡である。

概要：Ⅰ区～Ⅳ区の調査区を設定した。

石垣　Ⅰ区とⅡ区の間に石垣が築かれている。これは調査前より判明していた。この石垣によるⅠ区とⅡ区の比高差は約130cmである。石は、丸石の乱積みで下段の基礎の部分に大きく重い石を二段据え天端に近いところは、小さい石を積んで均している。植林とその後の根の侵食によって築造時の位置からずれているにもかかわらず、崩れることなく安定している。

土層の堆積により地山を削り旧表土である黒ボク層から石を積み地山の砂礫層の土砂で裏込している。石を積む→裏込め‥を数度繰り返し、石積みを完成させている。

この石垣は奥（南方）に21m続き、途切れた地点に墓石があった。石垣からの遺物の出土はなかった。

Ⅰ区　Ⅰ区には遺構はなかったが、黒曜石の

剥片が出土した.

Ⅱ区　Ⅱ区は地山の砂礫土で地面を平らに均している。その砂礫層の直下より陶磁器片が出土した。(小片のため時期不明)　ピットを３個検出した。いずれも丘陵の北端部の稜より約２m内側で稜線にほぼ平行に2～2.5mの間隔で並んでいるので　安全柵の跡ではないかと考えている。

Ⅲ区　Ⅲ区では80×50×50(cm)の大きな石が据えられていた。Ⅱ区と同じく砂礫層の下より陶器片（江戸末以降か）が出土した。

また、南端部は石積みをし上段(南側)と下段（北側）の比高差は約70cmであった。

Ⅱ区～Ⅲ区にかけて崖部にも石垣が見られた。石垣をめぐらし斜面を均し、敷地を増やした。敷地の境界を明確にするために石垣を築いた。そして、Ⅲ区の大きな石は庭石と考えられる。

Ⅳ区　Ⅳ区では地山の砂礫層上の真砂土から黒曜石剥片が出土した。Ⅰ～Ⅲ区で表土採取した黒曜石製鏃が縄文時代（か）なので、Ⅳ区では縄文の遺構の有無も確認した。結果、遺構無し。

まとめ：第31図に示しているように屋形遺跡周辺には，墓石が点在している。その中で転倒していたＣを除いてすべての墓石から年号が判明した。天保10(1839)年～慶応2(1866)年である。これにより江戸終末期に人々が生活していたことがわかる。墓石は、Ⅰ区の平坦面上もしくは延長線上にあり、屋形遺跡と深く関係していた人間の墓と思われる。また、Ａは田部姓で鍛冶の技術者を吉田村田部氏から招きいれたのではなかろうかと推察される。今回の調査では、遺跡の先端部分のみが対象であったため、直接、屋形遺跡を田儀宮本櫻井家の製鉄事業に結び付けられるような遺物や遺構は無かったが、３個出土した鉄滓はいずれも鍛冶滓であったことは宮本櫻井本宅周辺が大鍛冶、小鍛冶場であったことと関係するのではないかと思われる。出土した鉄滓は，遺構に伴うものではない。当時土地を平らに均すときに屋敷中心部より運んできた土

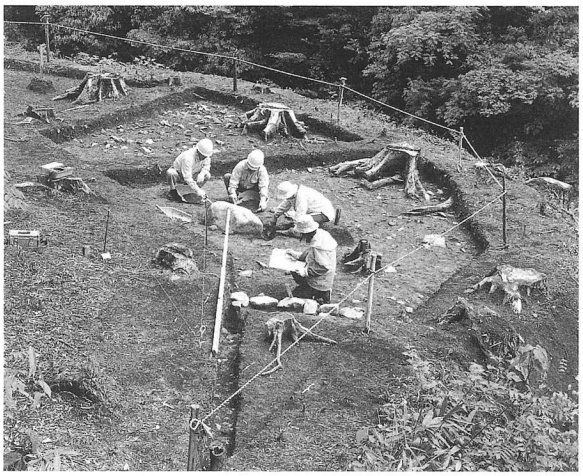
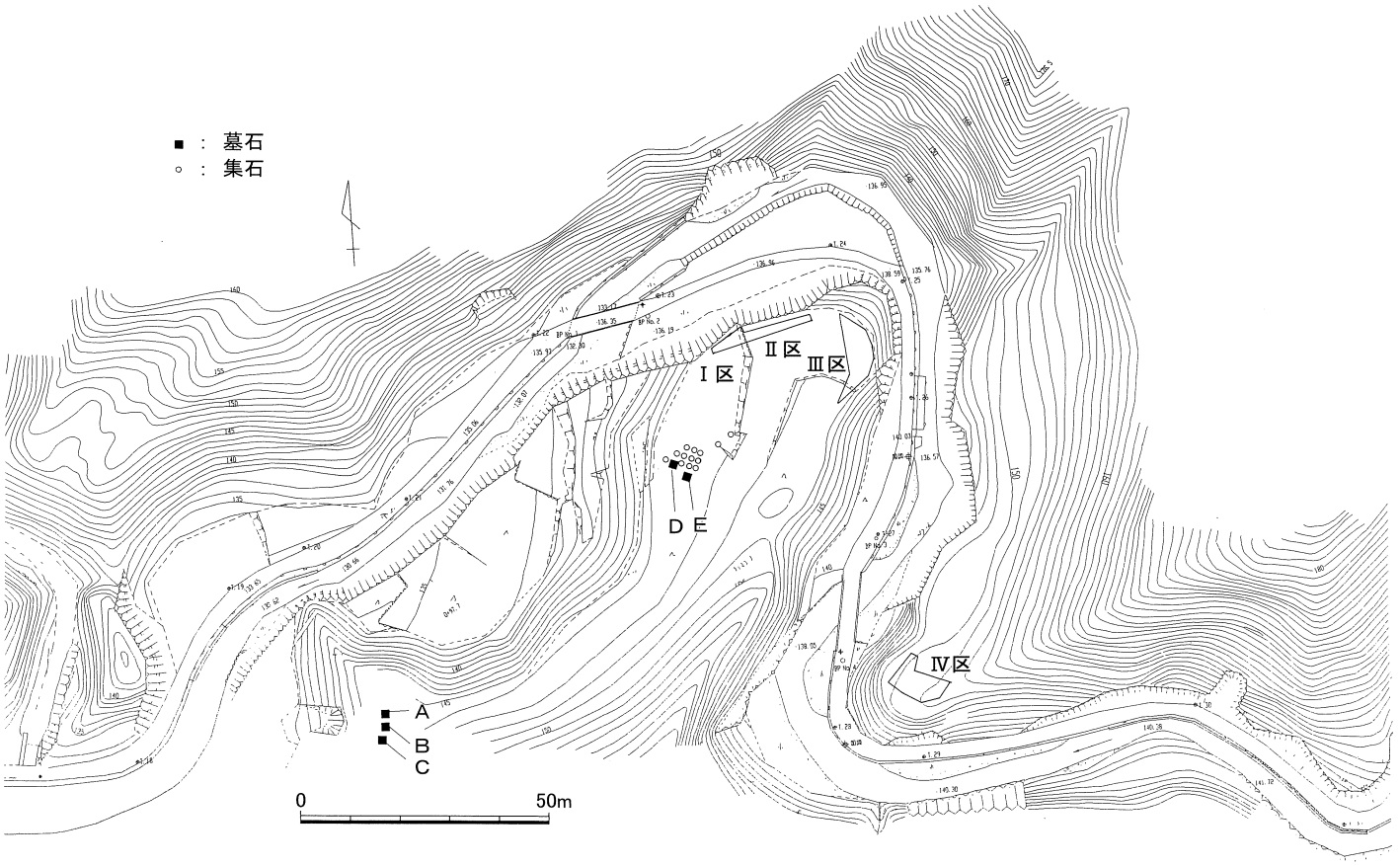


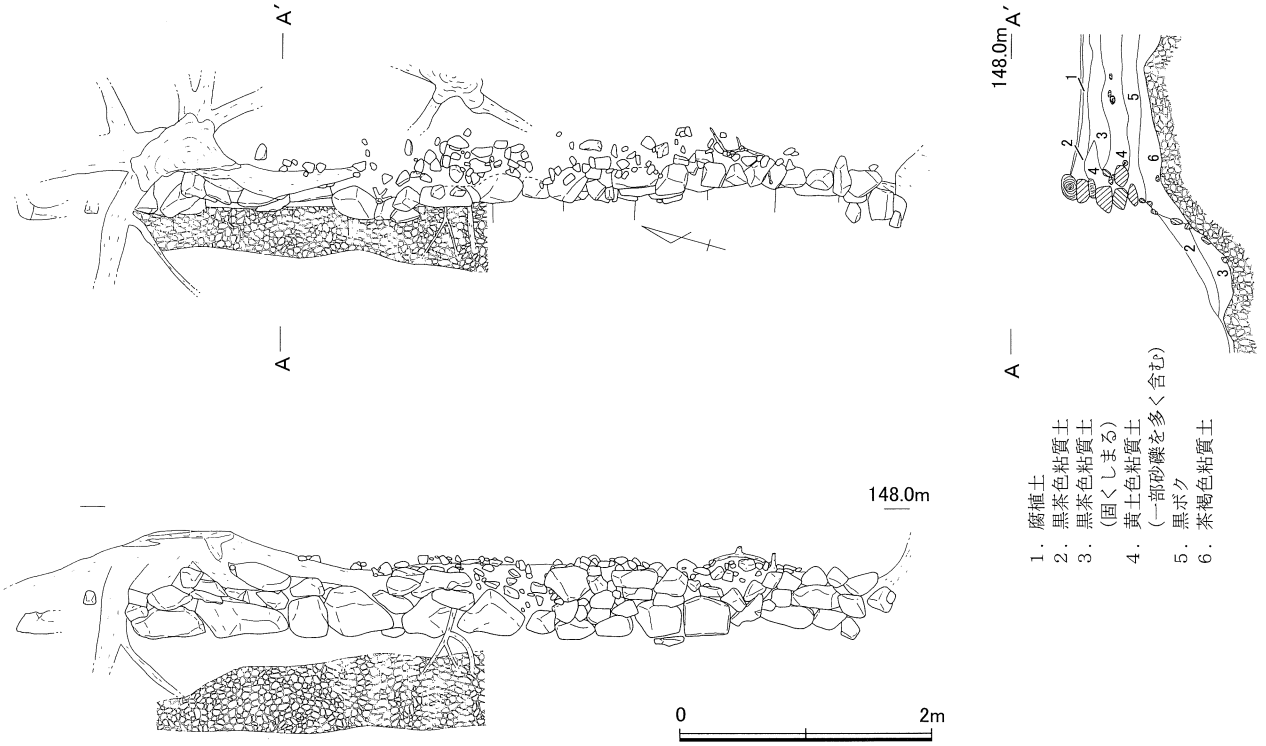
写真 98　屋形遺跡調査風景
（南から）

写真 99　屋形遺跡石垣
（西から）

写真 100　屋形遺跡石垣断面
（南から）



第 31 図　屋形遺跡周辺地形図 (1/1, 500)



第 32 図　屋形遺跡 石垣実測図 (1/60)

砂に混ざって流入したのであろうとの見解である。　（阿部智子）

３．掛樋たたら跡

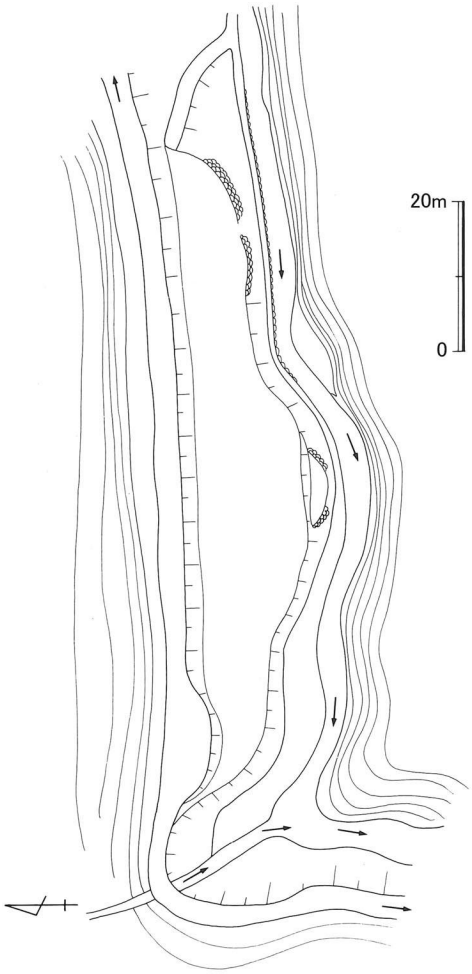
所在地：多伎町奥田儀字掛樋

立地・範囲：宮本地区より約1.5km上流に位置する。立地する場所は宮本川の支流の屋敷川右岸。当該個所は川沿いの狭長な段丘状平坦面（標高180m、東西・川沿い約90m、南北・巾約10～20m程度）で、前面は山裾が水流に洗われてできた高い崖（川面より８～10m高い）となっている。

遺跡の構造と時期：卜部吉博・田中迪亮両氏の踏査[4]によって製鉄跡と認定された遺跡である。川沿いの比較的まとまった整然たる平坦部でわれわれの踏査においても鉄滓を採集し、製鉄遺跡であることを再確認した。おそらく、生産地として山裾を削り、川側の要所要所に石垣築くなどして平坦面を造成している。面一帯はブッシュに覆われているため細かい遺構状態等は不明。崖裾には回廊状に小径が走っている。

まとめ：製鉄関連の遺跡であることは疑いない。しかし、鉄滓の散布量が少なく、鉄滓そのもの形状からも製錬遺跡とするよりも「大鍛冶」的な遺跡とみるのが現状では妥当かと考えられる。やや孤立的な立地個所、平坦面の広がりからも叙上の想定が是かと思われる。

写真 101　掛樋たたら跡の石垣（南から）



第 33 図　掛樋たたら跡略測図（1/1,000）

（田中）

４．屋敷谷たたら跡（屋敷谷Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡）

所在地：多伎町大字奥田儀字屋敷谷

立地・範囲：田儀川の支流宮本川の上流に位置し、宮本鍛冶屋跡から約1.5km～２kmほど谷奥に入った場所に存在する。

屋敷谷たたら跡については、島根県教育委員会によって1983年に報告された製鉄遺跡の分布調査報告により鉄滓が採取されているが、今回の分布調査ではその採取位置もたたら跡の位置も特定できなかった。

このことから、掛樋たたら跡より上流で確認されたたたら跡の可能性が考えられる遺跡を屋敷谷Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡と３つに分けて報告したい。なお、屋敷谷たたら跡については屋敷谷Ⅰ遺跡と同一である可能性が最も高い

が、調査では確証を得るに至らなかった。

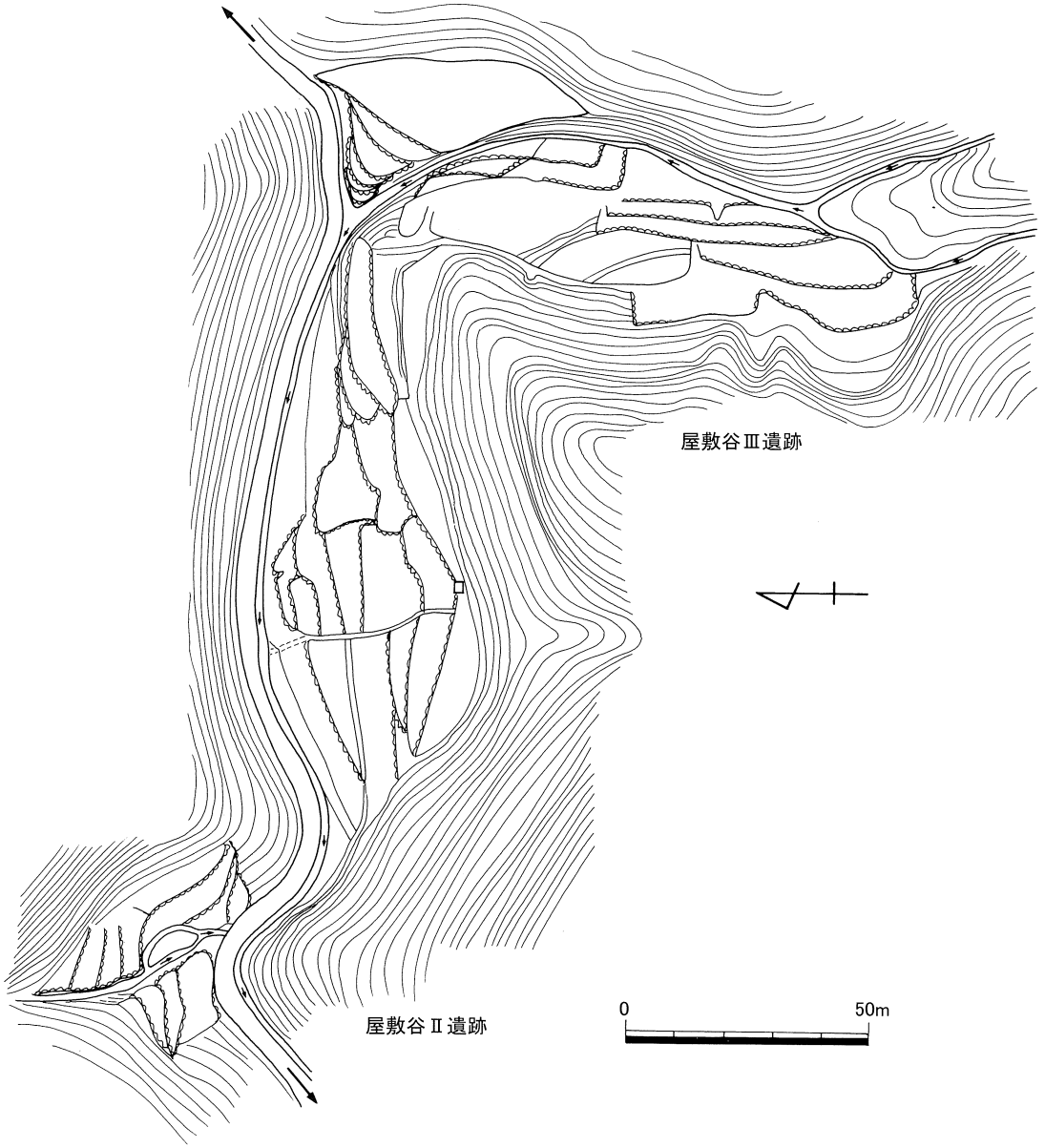
（1）屋敷谷Ⅰ遺跡

立地・範囲：宮本川に注ぐ谷川が合流する標高約200m付近の開けた場所に位置している。

概要：谷川の西側には石垣による平坦面が数段確認され、東側にも平坦面が見られるが、石垣はなく、近代以降の炭窯が確認される。

西側の石垣による平坦面はその立地から耕作地として利用されていた可能性も否定できないが、宮本鍛冶屋跡で見られる石垣による平坦面に類似していることから、たたらに関連する遺跡として考えている。

まとめ：製鉄に関連する遺物等は採取されていない。また、略測等の調査も実施していないことから、今後の調査により詳細な検討が必要な遺跡である。



第34図　屋敷谷Ⅱ・Ⅲ遺跡略測図（1/1, 500）

（2）屋敷谷Ⅱ遺跡

立地・範囲：宮本川に注ぐ谷川が合流する標高約200m付近の開けた場所に位置し、屋敷谷Ⅰ遺跡から約300m谷奥に入った場所に存在する。

遺跡は谷川の両岸に展開しており、その範囲は凡そ東西約50m、南北40mにわたっている。

概要：遺跡の立地はⅠ遺跡と似通っており、同じように石垣による平坦面が数段谷川の両側に認められる。

谷川の東側では、7段の石垣による平坦面が確認されており、西側では4段の石垣による平坦面が確認される。

確認される平坦面は、その立地から耕作地として利用されていた可能性もあるが、宮本大鍛冶場で見られる石垣による平坦面に類似していることから、たたらに関連する遺跡として考えている。

まとめ：Ⅰ遺跡と同じように製鉄に関連する遺物等は採取されていない。また、略測等の調査も今後実施し、詳細な検討が必要な遺跡である。

（3）屋敷谷Ⅲ遺跡

立地・範囲：宮本川に注ぐ谷川が合流する標高約200m付近の開けた場所に位置し、屋敷谷Ⅱ遺跡から約100m谷奥の宮本川左岸に近接するように存在する。

遺跡の範囲は凡そ東西150m、南北120mにわたる大規模なものである。

概要：遺跡の立地はⅠ・Ⅱ遺跡と似通っており、同じように石垣による平坦面が数段谷川の両側に認められるが、その規模は大規模なものであり、また、石垣による平坦面がある側の宮本川の川岸には護岸のための石垣が築かれている。

遺跡は谷川の両岸（東西）及び宮本川に沿ってそれぞれ石垣による平坦面が築かれ、谷川の東側には5段以上の平坦面が凡そ東西25m、南北50mの範囲に築かれている。

一方で、谷川の西側には凡そ南北（谷川沿い）130m、東西40mの範囲に7段程の石垣による平坦面が広範囲に確認されている。また、それに続いて宮本川沿いに下流に向かって凡そ東西（宮本川沿い）130m、南北40mの範囲で6段程の石垣による平坦面が認められる。

確認される平坦面は、その立地から耕作地として利用されていた可能性もあるが、宮本鍛冶屋跡で見られる石垣による平坦面に類似していることや平坦面の規模が近いこともあり、たたらに関連する遺跡として考えている。

まとめ：Ⅰ・Ⅱ遺跡と同じように製鉄に関連する遺物等は採取されていない。今後詳細な調査を実施し、たたらにどのように関連していた遺跡であるのか検討が必要である。（原田）

写真102　屋敷谷Ⅰ遺跡（南から）

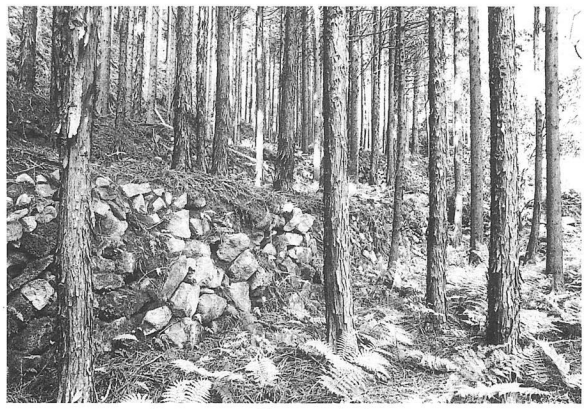


写真103　屋敷谷Ⅱ遺跡（西から）

写真 104　屋敷谷Ⅲ遺跡（西から）

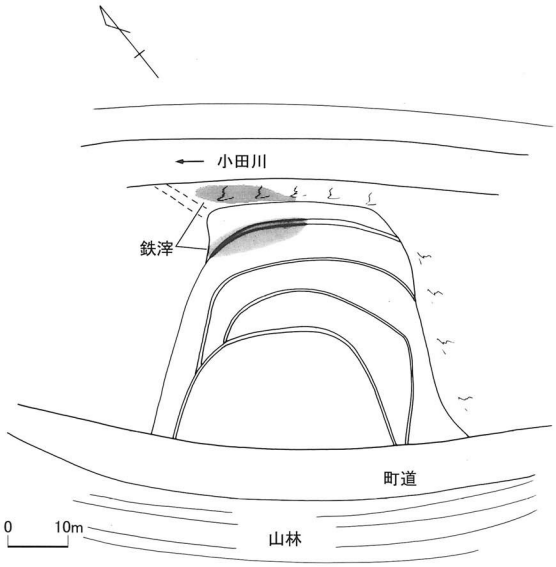
や焼け土を含む土層は川側の低い部分の崖面で認められ、厚さは20～30cm程である。幅は８ｍ程しかない。なお、鉄滓は崖面８ｍ程に存在する。また、川岸に落ちているものもある。鉄滓は流動滓で、少量である。この遺跡は、散布範囲が狭いことより野たたら跡と推定される。（西尾）

５．西明原の前たたら跡

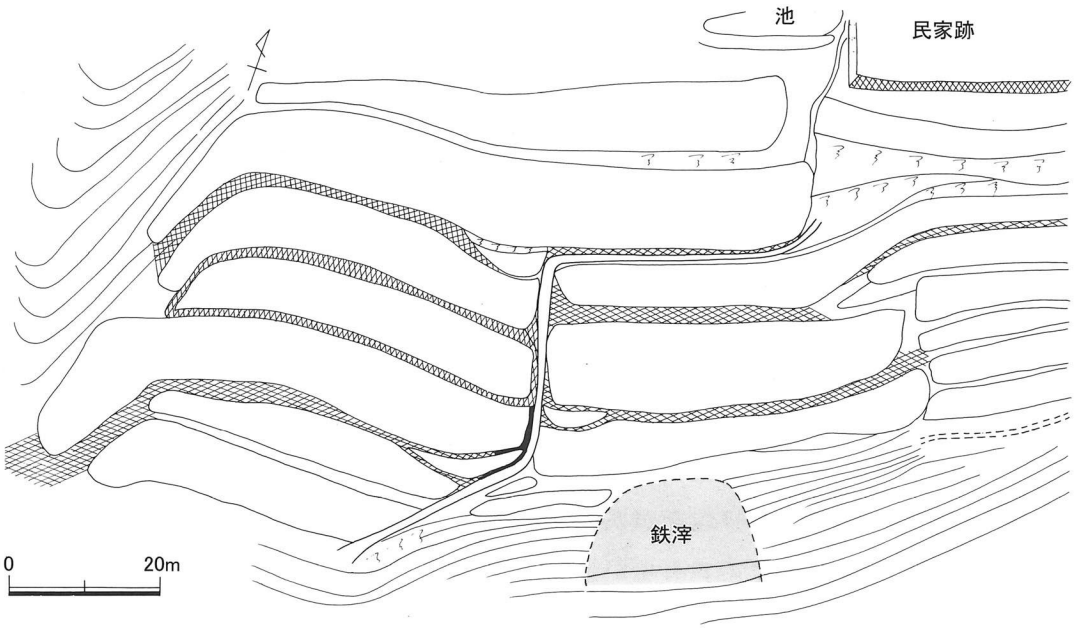
所在地：多伎町小田

立地・範囲：小田川の支流の西明川上流に位置し、小田川河口から4.5km、小田川と西明川の合流点から約2.5kmの狭い谷間に所在する。現地は、川沿いにある10m四方の小さい舌状の台地で、西側は丘陵斜面となる。

遺跡：舌状の台地は西側が道となり、大部分は、以前は４段からなる畑地となっていたようであるが、現在は果樹が植えてある。鉄滓



第 35 図　西明原の前たたら跡略測図（1/1, 000）



第 36 図　西明原たたら跡略測図（1/1, 000）

写真 105　西明原の前たたら跡（北から）

写真 106　西明原たたら跡（西から）

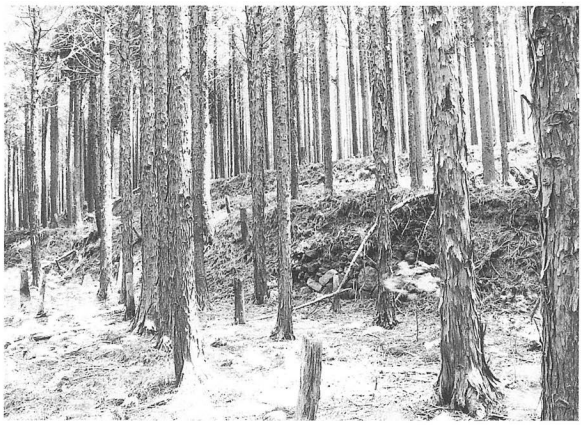


写真 107　西明原たたら跡（西から）

6．西明原たたら跡

所在地：多伎町小田

立地・範囲：小田川の支流の西明川上流位置し、西明原の前たたら跡から200m程奥にあたる。遺跡は、川の東側山麓の狭い谷間に所在する。

遺跡：川沿いの斜面に、多くの鉄滓が散布している。この斜面上の方に、細長い水田跡が５～７段存在する。田圃と田圃との間の崖には石垣が積まれ、棚田状となっている。今は植林され、山林化している。この水田跡の最高部には戦後まで民家が１軒あり、そこへ向かう小径が水田跡の中にある。

鉄滓や炉壁は川側の急な斜面に認められる。また、下方の川岸に落ちているものもある。製鉄跡は鉄滓が散布している斜面の上にある上下２枚の水田跡に存在すると推定される。

鉄滓はほとんどが流動滓である。なお、炉壁にはスサが含まれていない[5]。（西尾）

7．堂のそねたたら跡

所在地：多伎町小田

立地・範囲：小田川支流の西明川上流の狭い谷間に位置する。遺跡は西明川とその支流が出合う地点にあり、西明原たたら跡からは500m程奥にあたる。

遺跡：合流地点の西側斜面の東西10～15m、南北50mmの狭い場所に存在する。川からの比高差６ｍ。東側が林道となり、以前は２段かなる水田となっていたようであるが、現在は山林となっている。鉄滓を含む土層は道沿いの低いテラス状の崖面で部分的に認められる。表土下50cmで、厚さ40cmの層がある。鉄滓は少量の流動滓で[6]、散布範囲が狭いことより野たたら跡と推定される。（西尾）

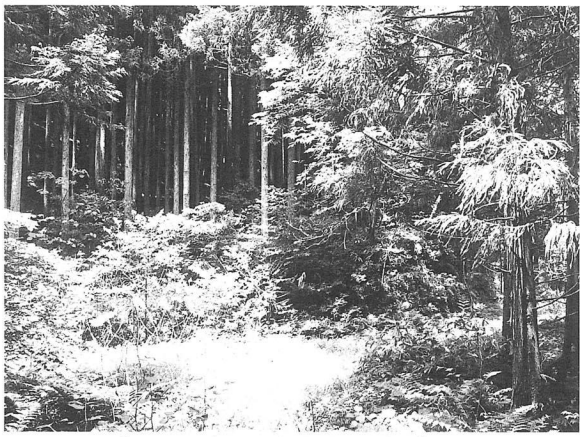
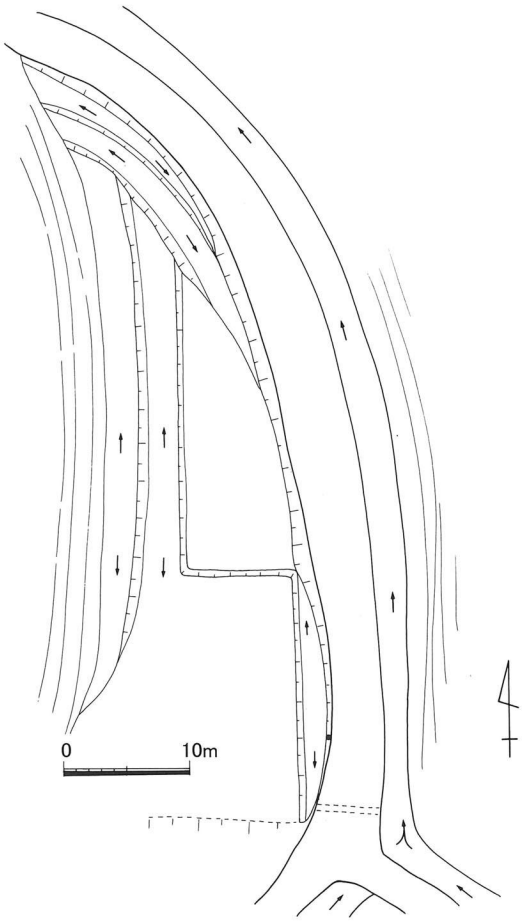


写真 108　堂のそねたたら跡（南から）



第37図　堂のそねたたら跡略測図(1/600)

8．茗ヶ原奥たたら跡

所在地：多伎町大字小田字茗ヶ原

立地・範囲：小田川が上流域で二つに分かれるうちの西側の川に面した丘陵先端部に位置している。

現地は、合流部からは約２km奥に入り谷地形が狭まる辺りになり、丘陵先端部から斜面にかけて存在する平坦面を含めた東西約20m、南北約30mが遺跡の範囲と考えられる。

概要：現地では、丘陵先端部の平坦面とそれから一段高い位置にあるやや平坦面が確認され、谷川沿いの幅約２mの山道では多くの鉄滓が確認される。

丘陵先端部の平坦面は東西約７m、南北10mの小規模な狭い範囲のものであり、平坦面には大量の鉄滓が確認されることから、この部分は排滓場であったものと推測される。

上方の平坦面は東西約10m、南北25mの範囲のもので、平坦面の中央部は近代以降の炭窯によって大きく掘り返されている。おそらく、この平坦面にたたら本体が置かれていたものと想像される。

遺物：丘陵先端部の平坦面や下方の山道で採取した鉄滓等は製錬に関わるものと考えられる。

まとめ：平坦面の規模から大規模な高殿たたらが存在するような操業を行っている場所ではなかったと考えられる。おそらく、中世頃の野だたらによる操業であったものと想像される。

田儀櫻井家が操業する以前の当地域の製鉄の様相を把握することが可能な遺跡であり、注目される。（原田）

写真109　茗ヶ原奥たたら跡（北から）

写真110　茗ヶ原奥たたら跡（南から）

９．聖谷たたら跡

所在地：多伎町大字奥田儀字聖谷

立地・範囲：小田川が上流域で二つに分かれるうちの西側の川沿いに位置しており、谷川が合流するやや開けた場所に存在する。また、茗ヶ原奥たたら跡からは約500m谷奥に位置している。遺跡は谷川の両岸に展開しており、その範囲は凡そ東西約40m、南北約100mにわたっている。この遺跡からは谷川沿いに沿って道が谷奥まで続いており、谷が分岐するあたりから宮本側へと山越えする道が以前には存在し使われていたようである。それに関連するように、谷奥には石垣による平坦面が２箇所確認されている。

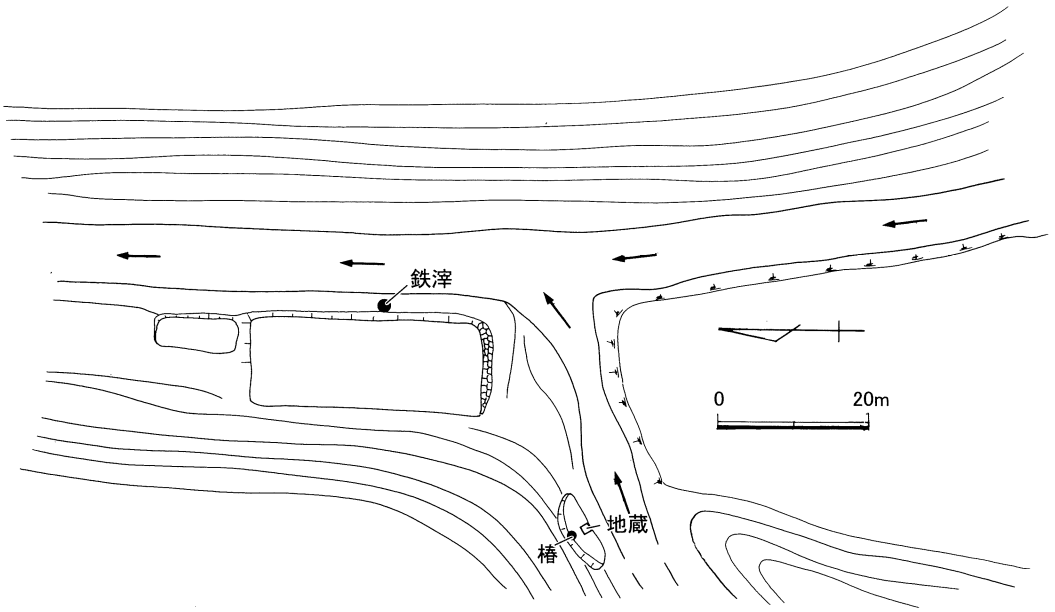
谷川の北側の概要：谷川が合流する北側には、石垣による平坦面が小田川に沿った約幅２ｍの道沿いに２段存在し、また、西に回りこんだ谷斜面には石垣による小規模な平坦面が確認される。小田川に沿った平坦面は、南北約30m、東西約９ｍの規模のものとその北側に一段低くなった南北約10m、東西約４ｍの小規模なものが存在しており、南側の大きい方の平坦面に沿った道では鉄滓を採取している。

西側の谷斜面に存在する平坦面は東西（谷川沿い）約7.5m、南北約４ｍの小規模なものである。この平坦面には石龕（第27図）が置かれており、現在は移されているが中には石地蔵が安置されていた。詳細は第８章の石造物調査の成果に譲るが、この地蔵の台座には田儀櫻井家５代宗兵衛清矩の名が施主として刻まれており、このことから本遺跡が確実に田儀櫻井家に関連するたたら跡であると言うことができる。

谷川の南側の概要：谷川が合流する南側には、東西約40m、南北約50mの広い平坦面が存在しており、この平坦面も何らかの作業面等として機能していた可能性が考えられる。

遺物：採取された鉄滓は、全体的にガス質のものであり、炉底塊、鉄塊系の物が存在している。これらの採取遺物から想定されるたたら製鉄の様相は銑を主体とした操業であったと思われる。

まとめ：平坦面の規模から山内を伴うような大規模なものではなく、小規模な銑を主体とするたたら製鉄が行われていたと想定される。この遺跡の重要性は、地蔵に刻まれた銘から



第38図　聖谷たたら跡略測図(1/1,000)

確実に田儀櫻井家に関連することが分かる唯一の遺跡であることである。今後の周辺部の関連遺跡との関係を解き明かす上でも重要な位置を占めている遺跡と考えられる。（原田）

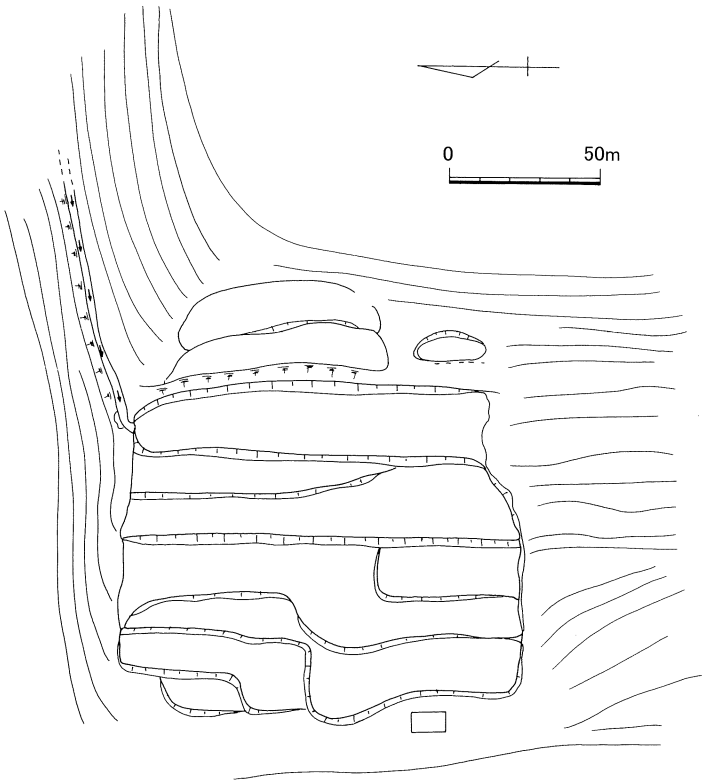
10．道ヶ崎たたら跡

所在地：多伎町大字小田字道ヶ崎・金床

立地・範囲：小田川の上流域の右岸に位置し、谷川が合流する緩斜面上に存在する。河口からは約５㎞程遡る。

遺跡は標高200m程の緩斜面に存在し、現況は水田及び畑となっており、操業当時の状況からは大きく変わっていると思われるが、その範囲はおそらく東西約100m、南北約100m（川沿い）にわたる大規模なものと想像される。

概要：現況は大きく４～５段に分けられる棚田として利用されており、それぞれの段には石垣が築かれている。この石垣の中にはその積み上げ方法等から見て近世頃まで遡る古い様相のものも存在している。



第39図　道ヶ崎たたら跡略測図（1/1, 500）

写真111　道ヶ崎たたら跡（西より）

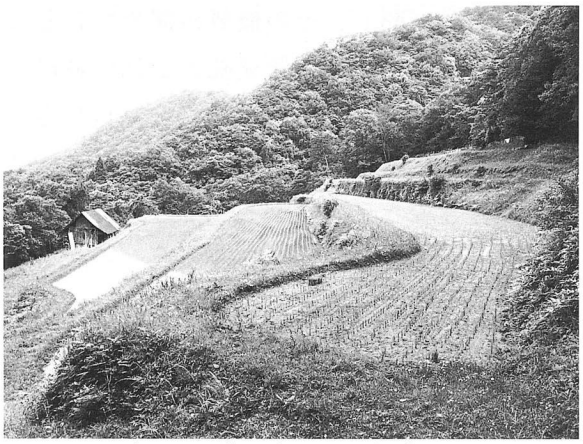


写真112　道ヶ崎たたら跡（南より）

水田として利用されている段は長方形に整然と区画されているものではなく、農作業用の小屋のあたりで西側に湾曲しながら飛び出している。おそらく、この部分が丘陵の稜線上にあたり両側の谷部を埋めて造成した名残と考えられる。

また、遺跡の北東側には谷斜面に沿って帯状の平坦面が存在し、山側には溝が掘られ水路として機能している。

水田として利用されていない山腹側にも平坦面が存在しており、これらも製鉄関連の操業に関わるものと推測される。また、独立して存在する小規模な平坦面には杉とタブの木が１本ずつ生えており、金屋子神社が置かれていた可能性も推測される。

これらの水田面等が創業時の作業面や生活面として利用されたものを反映しているとすれば、たたら跡だけではなく山内もセットになる大規模な操業が行われていた場所であったと想像される。

遺物：農作業用の小屋周辺では、多数の製鉄関連遺物を確認することができることから、この周辺に排滓場や製鉄関連の炉が存在していた可能性がある。

現地で確認される製鉄関連遺物は、炉内に鉄分が少ない時点にできるしまった滓と炉内に鉄分が多い時点でできるガス質の滓の２種類があり、観察の限りでは製錬が行われていた可能性が指摘される。

まとめ：遺跡は製錬に関わる高殿たたらとそれに伴う山内がセットとなる大規模なものである可能性が考えられ、田儀櫻井家との関連等について今後の詳細な検討が必要な遺跡である。（原田）

11．加賀谷たたら跡と関連建物等の調査

田儀櫻井家の最後のたたらとされる加賀谷たたら跡について急遽踏査を行なった。以下、その実施状況について述べる。

所在地：佐田町大字一窪田字加賀谷

立地・範囲：神戸川の支流伊佐川の河谷に営まれたたたら跡で、神戸川の合流点からは約１㎞上流になる。当該地は狭い谷間に位置し、現在は川を挟んだ両岸のやや急な斜面に遺跡と建造物がみられる。標高は150～200m。範囲は特定しにくいが、東西約100m、南北約150mと推定される。便宜上、左岸と右岸に分けて概況を記すこととする。

左岸の遺跡・建造物：一窪田から伊佐川に沿って大田市山口町佐津目方面に通ずる県道281号線の左右に遺跡と建造物が現存している。建造物の代表格は現山崎家の邸宅・倉庫で、その斜め背後の山腹に金屋子神社（近世の棟札＝文久2(1862)年）が祀られる（これらの詳細については各担当委員の報告に譲

る）。製鉄炉は道路下方の段々に造成された水田中に存在したとされる。付近には鉄滓が散布し、その可能性は否定できないが、炉跡と目された焼土所在の一帯は狭長な水田面で果たして「永代炉」のような大型の構築物を配置しえたかは疑わしい。後世、水田造成による地形の大規模な改変があったとすれば別であるが。

右岸の遺跡：川沿いに狭い平坦面（標高150m）があり、続く山腹に階段状の石垣遺構が存在している。長さは約70m、高さは全体で約50m（最高位の標高200m）に及ぶ。平坦面では鉄滓が採集されている。金屋子神社に併祀されている愛宕社は以前この階段状石垣遺構群の上方の山腹にあったとされる。詳細な調査が必要であるが、従業者の家屋等が建てられていたことを推測させる。生産遺構の存在も考えられよう。

まとめ：加賀谷たたらの操業開始が、19世紀第３四半期にあることは金屋子神社の棟札等から知られる。考古学的な遺跡・遺構としてその所在を確認できる物証には山崎家の対岸、伊佐川右岸の階段状石垣遺構群があり、金屋子神社の灯篭2基等がこれに次いでいる。現山崎家邸宅・倉庫は終焉期の田儀櫻井家の事務所兼居宅であり、往時の趨勢を伝える貴重な文化財といえる。また、山崎家が所蔵される金屋子神社の幟には「安政5(1858)年」の記載がある。同じく炉底塊と思われる重量のある「鉄塊」が所蔵されている。同家背後の山腹で採集されたものという。[7]（田中）

第３節　田儀櫻井家に関わる製鉄関連遺跡の評価と課題

平成15年12月から平成16年５月にかけて田儀櫻井家の経営に属すると思われる製鉄関連遺跡の調査を実施した。短期間ではあったが、集中的な踏査によって所期の目的は達成できたものと考える。以下、その成果を要約し、今後の課題を整理しておきたい。

成果の第一は宮本鍛冶屋跡を中心とする遺跡や建物群に関し、その概要が掴めたことである。左岸の本宅跡、智光院とこれに隣接する墓地群、右岸の「大鍛冶場」とみられる個所、山内集落跡、水丸子山墓地、金屋子神社等が一体となって小規模なIronTownを形成していたことがほぼ確実となった。そして盛行年代が19世紀前半にあり、終焉についても明治15(1882)年の「宮本火災」との関連がうかがわれる等、宮本地区の歴史的変遷の輪郭がかなり明瞭になったものと考える。

第二としては田儀・宮本・屋敷川の谷筋が田儀櫻井家の製鉄業に関わる人・モノの動脈をなしていたと想定できたことをあげよう。越堂たたら跡―草井谷鍛冶屋跡―宮本鍛冶屋跡・山内集落跡―屋形遺跡―掛樋たたら跡―屋敷谷Ⅰ～Ⅲ遺跡等一連の製鉄関連遺跡群が下流から上流に向かって踵を接して並ぶ様は近世鉄生産の典型地域として見做しうる可能性がある。宮本鍛冶屋跡・山内集落跡がこの動脈の心臓部に相当することも知られるのである。

第三には三瓶山北東麓に広大な鉄生産ゾーンの存在を予測できたことがある。小田川とその支流群の最上流部には道ヶ崎たたら跡、茗ヶ原奥たたら跡、聖谷たたら跡、西明原の前たたら跡、西明原たたら跡、堂のそねたたら跡等の遺跡群が存在する。これらのたたら跡が田儀櫻井家の製鉄事業とどう関わるのか

今後の検討課題ではあるが、聖谷たたら跡の地蔵像台座に４代櫻井宗兵衛清矩の銘が刻まれていたことはきわめて示唆的であるといえよう。佐田町朝日たたら跡や加賀谷たたら跡等の神戸川筋に展開する遺跡群から大田市日の平たたら跡を結ぶ東西の鉄生産ルートに繋がるこれら諸たたら跡群は田儀川・宮本川・屋敷川の動脈に直接・間接の連関を有して終始しことが推定される。[8]

以上の所見は、いずれにしても、踏査による観察を主とするものであり、田儀櫻井家の鉄生産に関する考古学的なデッサンに止まるものである。今後、さらに、調査研究を継続してより正確な知見を積み上げ実態に迫る努力が必要と考える。とりわけ、次の諸点は可能な限り早期に取り組むことが求められよう。

① 田儀川・宮本川・屋敷川の谷筋の徹底した分布調査と個々の遺跡の性格把握。就中、屋形遺跡、屋敷谷Ⅰ～Ⅲ遺跡にみられる石垣段状遺構の解明が急がれよう。

② 上記の遺跡群から採取された鉄滓の観察からは近世前半から中世期に溯る鉄関連遺跡の存在が推定される。今後、田儀櫻井家が宮本地区を砦として事業展開する前史の追及が求められるところであろう。

③ 豊富な文献史料と考古学的な調査結果の効果的衝き合せによる田儀櫻井家史年表の作成が必要と考える。　（田中）

【 註 】

（1）島根県教育委員会 1983『島根県生産遺跡分布調査報告書Ⅰ－出雲部製鉄遺跡－』

（2）多伎村役場 1961『田儀村誌』

（3）現地で伐採後の切り株の年輪を測定した。94、90、91と３本測定して平均値＝92年前を出した。

（4）註（1）に同じ。

（5）穴澤義功氏（たたら研究会委員）の教示による。

（6）註（5）に同じ。

（7）加賀谷たたら跡の調査に際しては、山崎順子さんを初め同家の方々の厚意と協力をえた。記して謝意を述べる。

（8）佐田教育委員会 1983『朝日鈩』
大田市教育委員会 1987『大田市埋蔵文化財発掘調査報告６－日の平鈩跡発掘調査報告－』

第10章　田儀櫻井家に関する基礎調査の意義

河　瀬　正　利

はじめに

わが国古来の製鉄法の一つに、砂鉄を鉄原料とし、木炭を燃料とする砂鉄製錬法がある。近世以降になって、中国山地一帯で砂鉄製錬が盛んに行われきたことは、古文書、絵図などの文献資料からも、また、製鉄遺跡や鉄滓の分布状況などの考古資料からもよく窺える。江戸時代後半から明治時代にかけては、中国山地における鉄の生産量は、全国随一の量を誇っており、時には全国の生産量の90%以上を占めるほどであった。これは中国山地一帯が、花崗岩類を基盤とし、良質の砂鉄の産出地であったことと燃料となる木炭資源の森林にも恵まれていたからであった。また、製鉄技術の面でも他に先駆けて製鉄炉の下に「床釣り」と呼ばれる保温、防湿のための大掛かりな地下施設を設けたことや鉄生産量を大幅に高めることのできた送風装置の天秤鞴を採用したこと、さらには原料砂鉄を効率よく大量に採取することを可能にした「鉄穴流し法」を考案したこと、なども鉄の大量生産を可能にした大きな要因であった。近世以降における中国地方の鉄生産の進展は、わが国近代産業発展のための重要な役割を果たしてきたといえるのである。

さて、島根県簸川郡多伎町教育委員会による平成15(2003)年から平成16(2004)年の２ヶ年にわたる田儀櫻井家のたたら製鉄に関する基礎調査の実施にあたりアドバイザーとして参加協力することができたことは、たたら製鉄の勉強を続けてきた者として大きな喜びであった。調査は、多伎町内のたたら製鉄関連遺跡の分布調査をはじめ石造物の調査、民俗調査、建造物調査および歴史的な文献調査などの総合調査として計画され、調査には島根大学、島根県埋蔵文化財調査センター、古代文化センターの研究者および多伎町・多伎町教育委員会ならびに町文化財専門委員の方などの参加協力があった。２ヶ年の計画とはいえ実質は、３～４ヶ月の短期間の調査であったにもかかわらず、田中義昭調査委員会会長はじめ調査委員会の方々の地道で意欲的な調査活動によってほぼ当初の目的を果たされ、その詳細を本報告書としてまとめられたことについて、まずもって敬意を表したい。また、今回の基礎調査を計画され、実行に移された多伎町・多伎町教育委員会の関係者の方々の英断に対しても敬意を表したい。

第１節　たたらの立地の特徴

今回の基礎調査の概要報告および現地踏査の結果から得られた成果を私なりに箇条書きにすれば次のようになろう。①古くから知られていた島根県有数の鉄師（田儀櫻井家）に関連するたたら製鉄遺跡について初めて基礎調査が実施され、田儀櫻井家の歴史にメスを入れられたこと、②短期間であったが関連分野を含む総合的な調査として実施された結果、小田川、田儀川およびその支流域のたたら製鉄関連遺跡の分布と概要の実態が明らかにされたこと、③たたら製鉄遺跡や金屋子神社、菩提寺、墓地、石造物などが良好な状態で遺存し、伝承されていることが明確になったこと、④田儀櫻井家に関わる文献もよく残されており、たたらの経営や流通の歴史に迫ることができたこと、などをあげることができるであろう。そして、今回の調査によって得ら

れた最大の成果は、なんといっても田儀櫻井家に関わるたたら製鉄関連遺跡を保存し、活用するための意義が明らかにされ、遺跡の整備を中心とした町おこし、地域おこしの施策の提言が可能になったことであるといってよい。

次に今回調査の対象とされた田儀櫻井家の製鉄の歴史を理解するために中国地方のたたら製鉄の実情について紹介し、田儀櫻井家に関わる遺跡の意義について私見を述べてみたい。

たたら製鉄関連遺跡の分布調査によると、田儀櫻井家に関連するたたら製鉄関連遺跡と推定される遺跡は多伎町および周辺の大田市、湖陵町、佐田町などに分布するが、今回の基礎調査によると多伎町内で16ヶ所の遺跡が確認されている。遺跡には製鉄（製錬）炉跡、鍛冶（精錬）炉跡や建物跡と見られる遺跡が含まれている。このほかに金屋子神社、菩提寺、墓地などのたたら関連遺跡や陶磁器などの遺物も確認されており、近世において盛んに鉄生産が行われていたことを示している。分布の特徴は、田儀川支流の宮本川沿いの宮本鍛冶屋跡の位置からも明らかなように南から北に流れて日本海に注ぐ田儀川の河口から上流約５kmの範囲と小田川河口から上流約４kmまでの海岸に近いところに位置していることである。中国地方のたたらの多くが原料の山砂鉄や木炭の調達に便利な山間部に位置する例が多いのに比べて、田儀櫻井家のたたらや鍛冶の多くが沿岸部に近い河川沿いに位置していることは大きな特徴である。日本海沿岸部に広範囲に堆積する浜砂鉄を利用する製鉄を行っていたからと考えられるし、また、田儀櫻井家の経営の中心が、宮本川流域に所在する本宅跡の宮本鍛冶屋跡であるように、たたらによる製錬よりも大鍛冶場における精錬作業を中心に操業していたからであると推定することができる。

第２節　近世たたら吹製鉄の特徴

ところで、近世のたたら吹製鉄の実情については、昭和初期に俵国一博士によって紹介された下原重仲の『鉄山必用記事』（別名『鉄山秘書』）[1]をはじめ安芸国の『芸州・加計隅屋鉄山絵巻』[2]、長門国『先大津阿川村山砂鉄洗取之図』[3]などや出雲国の田部家、絲原家、櫻井家などに残された古文書などによって技術や経営の実態を知ることができる。しかし、古文書や絵巻物などでは、製鉄作業の手順や作業の状況はある程度明らかにできるが、作業場の施設の配置や構造、製鉄炉内の製錬作業の状況や築炉の方法、製鉄炉の地下の状況などを、明らかにすることはできないといってよい。こうした意味で製鉄場の配置や構造などを考古学的な手法で調査を行って明らかにしていくことは近世たたら吹製鉄の実情を明らかにする上で大きな意義があるといえるのである。

さて、文献や絵図によると、近世の本格的なたたら吹製鉄は、原料の砂鉄の採取部門と製鉄や鍛冶で使う木炭の生産部門、製鉄炉での銑や鉧の製造部門、それに大鍛冶場における錬鉄の製造部門の大きく4つの部門で構成されている。このうち、砂鉄採取や木炭製造部門においては、一部地方農民の農閑期の副作業として行われた場合もあるが、製鉄、鍛冶の作業は村下や大工などの製鉄専業の技術者が従事していた。そして、たたら場（製鉄場）では高殿と呼ばれる製鉄炉のある建物を中心に、銑や鉧を冷却する鉄池、銑から錬鉄（庖丁鉄）を造る大鍛冶場、鉄塊である鉧を荒割りするどう場などの作業場やたたらの事務所である元小屋、製鉄従事者の住居である下小屋（長屋）、生産した鉄や木炭を納める蔵、製鉄の守り神の金屋子神社、製鉄従事者

の墓地などが配されていた。このほか炭焼き場や鉄穴流しの最終工程である砂鉄の洗い場などの諸施設を付属させる場合もあった。こうしたたたら場は、山内と呼ばれており、原料や製品の搬入搬出に便利な往還（街道）に近く、しかも製炭林の豊富な奥深い山の中に設けられていることが多い。山内は、垣根や矢来で囲まれ、中では製鉄専業技術者のほか製鉄に関わるさまざまな作業をする人々がまとまって生活しており、地方農村とは隔絶した生活圏を構成していたのである。

田儀川およびその支流の宮本川流域でみても、本宅跡とされる宮本鍛冶屋跡一帯には、大鍛冶跡、小鍛冶跡や鉄山事務所跡（本宅跡）、金屋子神社、櫻井家菩提所、墓地などが配されており田儀櫻井家の中心となる山内が位置していたと推定される。また、今回の調査によって確認された製鉄関連遺跡には、田儀川流域では奥田儀の宮本鍛冶屋跡のほか掛樋鈩（鍛冶）跡、口田儀の草井谷Ⅰ鈩（鍛冶）跡などの精錬遺跡や奥田儀の聖谷鈩跡、越堂鈩跡、小田川流域では小田の茗ヶ原奥鈩跡、西明原ノ前鈩跡、西明原鈩跡、道ヶ崎鈩跡などの製錬遺跡が存在する。遺跡の詳細は今後の発掘や資料の分析によらなければならないが、おそらくは鉄穴流しによる山砂鉄の採取や木炭などの製鉄原料の求めやすい田儀川、小田川、神戸川上流域においては、製錬（製鉄）作業を中心に行うたたら遺跡が存在し、こうしたたたらで生産した銑鉄を沿岸部や谷川沿いの街道に近い場所に設けられた大鍛冶屋へ搬入して錬鉄（庖丁鉄）を造って市場に搬出していたものと考えられるのである。なお、こうした製錬中心のたたらのほかに製錬場（たたら）と精錬場（大鍛冶屋）が併設されているたたらも存在していたことは中国山地一帯のたたらの多くから製錬滓と鍛冶滓が伴出していることからも明らかである。高橋一郎氏の研究によれば、近世後半には、製鉄炉の中で直接鋼を生産する製鉄法（鈩押法）よりも製鉄炉の中ではじめは銑を造り、その銑を大鍛冶屋で加熱鍛錬して錬鉄（庖丁鉄）を造る間接製鉄法（銑押法）が中心となっていたこと、また、こうした鍛冶屋で錬鉄を造って市場に出すほうが収益も高かったことが明らかにされている[4]。中国山地一帯の国では、たたらの数と鍛冶屋の数が同じか鍛冶屋の数が多いところが存在するのはこの間の状況を示すものであろう。

第3節　大鍛冶屋での錬鉄の生産

先述のとおりたたら吹製鉄の方法には、鈩押法（直接製鋼法）と銑押法（間接製鋼法）があった。両者は、炉の構造や作業の方法に大きな違いはなかったが原料として使用する砂鉄に違いがあった。鈩押法は、不純物の少ない真砂系砂鉄（磁鉄鉱）を主に用いて、炉の底一杯に鉄の塊（鈩）を造る方法であった。一方の銑押法は、不純物を含み、溶解温度の低い赤目系砂鉄（赤鉄鉱）を中心に使用して、木炭との直接還元によって和銑を生産する方法であった。花崗岩類を基盤とする中国地方では、ほぼ全域から赤目系砂鉄が産出することから、これを原料に一代を長くすることにより、多量の銑を生産する銑押法が広く行われていたが、真砂系砂鉄を産出する出雲や伯耆地方の一部においては鈩押法が主流であったといわれている。

鈩や銑に吹き分ける技術は、はじめから会得された技術ではなく使用する砂鉄や製錬作業の繰り返しによって経験的に習得された技術であった。製錬作業を繰り返すことにより産出する砂鉄の成分に適した製鉄技術が確立し、さらに製鉄技術者の交流を経て、技術が移転していったと思われる。『鉄山必用記事』に「延刃鉄と言うもの、近年は不流行故

に、延刃鉄する所作を知たる職人稀に成ぬ。往昔はフミフキ踏鞴ニ而、刃金は延計にて有し也。」[5]とあり、18世紀後半の高殿たたらの普及した時期においては、伯耆、出雲、石見といった真砂系砂鉄を産出する地域にあっても、製鉄技術者の間で延鉄（鋼）の生産技術が忘れられようとしていたことを記している。高殿たたらでの鉄生産は、銑鉄を造ることが主な目的とされるようになっていたことを示している。

銑押法で生産された銑は、そのままではまだ炭素分などの不純物を多く含んでいたので、もう一度加熱し鍛錬することによって脱炭を進め、鍛えることのできる鉄にする大鍛冶の作業が必要であった。大鍛冶場は、左下場と本場の二段工程で構成されていた。左下場では、火窪（鍛冶炉）と鞴（吹差鞴）を使って加熱し、銑を半溶融状態にして脱炭をすすめ左下鉄と滓を造った。こうして造った左下鉄もまだ炭素量が均一でなく、鉄滓も含まれているので、これを本場でさらに加熱して脱炭することによって卸し鉄を造った。卸し鉄も炭素の含有量は均一でないので、卸し鉄を鉄床（石）の上で十分に反復鍛錬を加えることによって炭素量の均質な錬鉄を製造したのである。仕上がった錬鉄は、形が庖丁に似ていることから庖丁鉄とも呼ばれていた。たたら場からは、庖丁鉄を束ねて菰包みにし、馬に背負わせて市場へ運び出していたのである。

近世後半における高殿たたらの普及、言い換えると多量の銑の生産は、当然のことながら多くの大鍛冶場が必要とされた。たたら（製錬）と鍛冶の工程を一貫して経営する鉄師のほかに大鍛冶のみを独立して経営する者もあらわれてきた。安芸国の山県郡の資料をみると、18世紀の正徳元(1711)年に鉄株認可とともに、鑪２、割鉄鍛冶（大鍛冶）24、釘地鍛冶５軒が定められており[6]、たたらの数に比べて鍛冶屋の数が非常に多いことがわかる。たたらでの鉄生産が銑の生産が中心であったことを示しているといえる。今回の基礎調査の結果から見て、田儀櫻井家の製鉄の中心は、宮本鍛冶屋跡や草井谷鍛冶屋跡における錬鉄の生産が中心であったと考えることが妥当である。

第４節　たたら遺跡の保存と活用

近世後半に進展を見せた中国地方のたたら吹製鉄の技術は、製鉄炉の下に床釣り施設が設置され長時間の操業が可能になり、覆い屋である高殿が設けられることによる通年の操業ができるようになったこと、また、送風装置として天秤鞴が採用され、製鉄炉内へ安定して風が送れるようになり、労働生産性が著しく増大したことなどにより、わが国独特の製鉄法として確立をみたといえよう。そしてたたらで生産される鉄は、中国地方一帯に広範に分布する直接還元性が大きく溶解点の低い赤目系砂鉄を多量に使う和銑を生産する間接的方法が主流となっていたことなどが明らかである。今回の田儀櫻井家に関わる遺跡の調査でも、沿岸に近いところを中心に遺跡が分布していることが明らかにされているが、おそらくは中国山地で産出する山砂鉄よりも神戸川などで採取した川砂鉄や日本海沿岸部に分布する浜砂鉄（赤目系砂鉄で不純物を含むと推定される）を使用して銑を生産することが主流であったと推定される[7]。

先述したように、田儀櫻井家に関わるたたら関連遺跡の多くが、日本海沿岸に近いところに分布していることは大きな特徴である。そして、たたら場（製鉄場）跡や鍛冶場跡などが良く遺存していることも遺跡群の考古学的、文化財的な価値を高めているものといえる。とくに櫻井家の本宅跡とされる宮本鍛冶

屋跡一帯には、本宅跡や鍛冶場跡、菩提寺（智光院）、金屋子神社、櫻井家歴代墓地、山内職人共同墓、石造物など山内を構成した諸遺構群が良く残っており、江戸時代後半の山内の原風景を現地で体感できることは貴重である。また、櫻井家に関わる文献資料の調査や民俗調査、建造物調査などによって、櫻井家のたたら経営の歴史や生活の実情が明らかにされるなど、今回の基礎調査によって田儀櫻井家を中心とした多伎町の製鉄産業の実情が解明されるようになってきたことは歴史的にも大きな意義があるといえる。今後は、たたら関連遺跡群の保存と活用の方策を早急に立案されることが必要であるが、保存整備にあたっては現代の多伎町の人々の生活とも関連するような体験的な活用公開策が計画実施されるよう要望しておきたい。

【註】

（1）ア、俵国一1933『古来の砂鉄製錬法』丸善.
　　イ、館　充訳2001『現代語訳鉄山必用記事』丸善株式会社.
（2）『芸州・加計隅屋鉄山絵巻』1961全２巻、便利堂.
（3）『先大津阿川村山砂鉄洗取之図』1976『江戸科学古典叢書』１、恒和出版.
（4）高橋一郎1990『奥出雲横田町とたたら』横田町.
（5）前掲註（1）.
（6）広島県1981『広島県史』近世１、通史Ⅲ.
（7）森山一止2002「奥田儀宮本屋桜井家文書目録」『古代文化研究』第10号、島根県古代文化センター.

第11章　成果の総括と今後の課題

田　中　義　昭

第1節　成果の総括

田儀櫻井家の製鉄事業に関する調査・研究は地元研究者の森山一止氏や郷土史家の渡辺勝治氏等によって精力的に進められ、成果があげられている。これらの業績は田儀櫻井家に関する豊富な文献史料に基づくもので、近世における出雲の鉄生産の実態と特性を明らかにして斯学の発展に少なからざる貢献をなしている。

多伎町当局においては、こうした文献史料中心の田儀櫻井家史から町域に残る同家関連の考古学的な遺跡・遺物、建造物、民俗資料等を広く渉猟し、近世の一大地域づくり産業として生成・発展・終息した田儀櫻井家製鉄事業史の総体を解明し、もって田儀櫻井家の歴史的顕彰と文化財としての活用を図り、年来の町づくりの一環に位置づけることを企図された。これを受けて町教育委員会を中心に直ちに調査委員会を組織、平成15年11月から必要な活動を実施し、同家に関る諸資料の基礎的調査を行ったところである。本書はその成果を盛り込んだ一書である。以下、各分野における成果を概観して田儀櫻井家製鉄事業の特徴的側面と意義を述べ、今後の顕彰と活用に資したい。

1．残存遺構の考古学的調査から

山陰地方の地域史を彩る産業に「たたら」製鉄がある。近世出雲においては田部家・絲原家・櫻井家の三家が製鉄事業に関り、実績を積み上げたことは周知であろう。三家を初めとする近世の鉄生産については、近年、史料による実態解明に加えて考古学や民俗学の方面からの調査・研究が進展している。また、たたら製鉄の研究は古代～中世期に及んでおり、これらの時期の様相も相当具体的に把握されるに至った。田儀櫻井家については田儀川支流の宮本川筋が鉄生産の核地域をになっているが、その拠点であった宮本鍛冶屋跡と関連遺跡・建造物・墓地等は該地区にきわめて良好な状態で遺存する。今次、皮切りの総合的調査はこの宮本地区で実施した。第２章「宮本鍛冶屋跡と山内集落跡」は件の考古学的調査を中心とした報告である。

宮本地区では川を挟んで両岸の河岸段丘から丘陵斜面に遺跡が広がっている。中核をなすのは左岸の本宅遺跡、智光院・田儀櫻井家歴代当主墓地と右岸の金屋子神社、山内集落跡で、これに墓地や製鉄跡等が加わる。採集された陶磁器片や墓碑銘からすると当地区の草創期は18世紀代初期に遡るとみられるが、最盛期は19世紀前半から中頃にあり、終焉期が19世紀末頃になることが知られた。このことは文献上の記載や智光院、金屋子神社等に残る記録とも矛盾しない。

宮本地区の遺跡群・建造物・墓石等の意義は、これらの製鉄関連遺跡・建造物が狭い峡谷に実にコンパクトに一体的に存在することであり、その歴史的遺産としての保存状態もすこぶる良好で、近世後半期における製鉄を軸にした小都市的様相をうかがうに十分なものがあるとしてよいであろう。

第９章「周辺製鉄関連遺跡の踏査」は宮本地区の調査と補完関係にある。田儀・宮本・屋敷川筋は田儀櫻井家製鉄事業の軸線をなしている。ここでは、既・新発見の遺跡８個所の存在が知られた。これらの諸遺跡は製錬・

大鍛冶（精錬）と生産従事者の居宅跡・墓地等を含むと考えられるが、詳細は別途調査によらなければならない。また、小田川筋では新発見の遺跡を加えて８個所の製鉄関連遺跡を確認した。この中、聖谷たたら跡で４代「宗兵衛清矩」と刻まれた地蔵像の所在が明らかにされたことが大きい。谷筋を違えた神戸川支流・伊佐川の加賀谷たたら跡は田儀櫻井家の一拠点製錬遺跡であるが、これらと大田市日の平たたら跡を結ぶ東西の生産ラインと宮本川筋の南北ラインとをＴ字状の軸線として鉄造りが展開されたものと考えることができる。おそらくは、原料の砂鉄、燃料の木炭、生産場所（経営本拠地）、輸送路等の諸要素を経営戦略に即して配置した結果がそこに示されているとみたい。

２．文献史料の調査から

第３章から第５章は文献調査の成果である。先述のように、田儀櫻井家には豊富な文献史料が存在し、製鉄事業を巡ってその主体となる人物とその行動が具体的に語られている。これは地方史上まことに貴重であり、その史的意義はすこぶる大きいといえよう。

第３章「田儀櫻井家の沿革」では文献に記された主要「たたら」・「鍛冶場」と操業年代、歴代当主とその経営状況が４期にわたって詳細に辿られた。鉄生産における分業と協業の仕組みの歴史的変遷と各段階での全体的な展開状況が具体的に読み取れるような指針が示されたものと考える。とりわけ、「田儀櫻井家たたら製鉄関係年表」の作成は今後の作業の道標として有益であろう。

第４章「田儀櫻井家のたたら製鉄業経営」は、前章と重なる時期の鉄生産の具体的状況とその背景について詳細に論じている。ここでは、田儀櫻井家の鉄生産の主眼が銑に置かれていたことを明らかにしつつ、間接官営「企業」としての利点とその限界を説く。その中で「小吹天秤」＋「鍛冶屋」スタイルの奥原たたら、吉原たたらと宮本鍛冶屋の関係や越堂たたらの立地条件のありように関する考察は、田儀櫻井家製鉄事業の特色を明らかにすると同時に田儀・宮本・屋敷川鉄ラインの意義を間接的に解いたものと理解する。

第５章「田儀櫻井家の産鉄流通について」では鉄の「流通」を切り口にして田儀櫻井家鉄生産業の特色に迫ろうとするものである。田儀櫻井家の鉄販路は大坂市場（松江藩介在）、地元需要（千歯鍛冶向け等＝明治６年）、北国方面の３方向に開かれている。これらが歴代同時平行的に存在したのか否かは詳らかでないが、藩権力の庇護に全て依存せず、独自のルートを開拓して事業の安定と拡大を志向した点は注目されよう。また、販売方法においても自営の廻船による仕方や鳥屋尾家のような船運専門業者を通しての販売等が行なわれており、自立的な経営の側面がここにも示されているとみる。関連して、交易港湾地として久村の存在が直営港の口田儀浦と共に目に着く。

３．建造物の調査から

第６章「建造物調査の結果」では宮本地区の智光院と金屋子神社、加賀谷たたら跡にともなう金屋子神社の3建築物に関して調査結果が報じられている。いずれも10代直敬、11代直順が活躍した繁栄期に建立されており、当時の経済力と鉄生産事業における一族・関係者の精神的拠所の創設による結集が期待されての建立であることが知られる。また、江戸末期の地方における建築様式を直に伝える建物としての意義も解かれる。

４．民俗資料の調査から

考古遺物と同様に民俗資料の調査は田儀櫻

井家と製鉄従事者等の営みを知る上で欠かせない。とりわけ、近世期の民俗資料は現在の生活資料にその脈絡を保っており、それらを使用・愛用した近世人の心の温もりを伝えるものとして貴重である。第７章「民俗資料の調査」は鉄生産という先進的事業に携わる人々の生きざまを身近にみるという期待を込めて実施されたものであるが、予想に反して良好な資料の存在を手にすることはできなかった。直接的な原因としては明治15(1882)年の「宮本大火」が考えられるという。ただ、残片的資料ではあるが、10代直敬奉納の太刀、「多四郎敬重」墨書のある欅製の書類箱等に片鱗をうかがうことができるように思われる。また、慈眼寺で使用されていたとする鉄製品（釘等）は製品化された田儀櫻井家の鉄の質を見極める資料となりうるものであろう。

金屋子信仰の顕彰も調査結果を起点として資料の蓄積を追及する必要性が述べられた。

５．石造物資料の調査から

第８章「石造物からみた田儀櫻井家」では多数存在する墓石等の銘文を中心とする調査結果が示される。近年、中・近世期の考古学的調査においては石造物調査が大いに注目されるようになった。理由は考古遺物としての様式や型と文字が一個の遺物に共存するという資料的特徴にあるとみる。今次調査で石造物を独立の調査項目とした所以もそこにある。

調査結果の第一注目点は田儀櫻井家歴代当主の墓地の解明であろう。この墓地は19世紀前半頃すなわち最盛期に整備された可能性があるが、初代以外は笠付方柱型墓標で使用石材も外地搬入品で福光石等の地元産はきわめて少ないという。本宅跡の規模・智光院の造作と仏像等に示される田儀櫻井家の威勢を偲ばせる遺品ということができよう。

次の注目点は智光院上の共同墓地と水丸子山墓地である。これは宮本地区における鉄生産の規模とその盛衰を直接語りかけてくれる遺跡で、隣接する山内集落跡と共に小生産都市相ここにありといった存在である。

第３の注目点には聖谷たたら跡に所在が確認された地蔵像である。先述のようにこの像には「享保十九年宗兵衛清矩」の銘文があり、草創期（確立期とするが可か）の担なった当主とその生産活動の具体的状況を知る貴重な手掛かりであろう。

以上の他にも金屋子神社の石造物の調査結果が示され、それら一つ一つに田儀櫻井家の歴史の断面が垣間見られた。

６．全体をとおして

考古学、文献史学、建築学、民俗学の４分野に、多くの資料が残されている石造物＝銘字学を加えた本調査は、田儀櫻井家の鉄生産に関していいくつかの重要な提言を行うこととなった。各分野の調査成果を整理したところで、いま一度それらの到達点の概容をまとめておきたい。

まず、第一に取り上げるべきこととして田儀櫻井家の鉄生産史とその変遷の諸画期が判明したことがある。これは、第３章、第４章において明らかにされているように、17世紀後半の創業期を受けた18世紀の第１次発展期（初代～５代）と18世紀末から19世紀初頭の困難期を克服した19世紀前半から中頃にかかる第２次発展期（９代から11代）の二つの活況期が認められた。この２活性期の存在は石造物調査においても裏付けられたところである。とくに、第2次発展期の諸相は宮本鍛冶屋跡の遺跡・遺物群、建造物、民俗資料、墓地によって具体的な把握が可能であった。要約的にいえば小鉄生産都市（タウン）の展開史として理解することができたわけである。

第二には、田儀櫻井家の鉄生産を基軸にした経営戦略とその実相が明らかにされたことを指摘しよう。その一側面は、越堂・日ノ平・加賀谷等のたたら場と宮本地区を核とする大鍛冶場の可変的で効果的な分業配置に表れる。このことは原料の砂鉄、燃料の薪炭類、販路等の立地条件を地域の実態（在地農民と山林の存在状況等）に即して選択することと深く結びついている。もう一つの側面としては銑鉄生産に軸足を置きながらも鋼、割鉄、「雑鉄」等々、大小・内外市場の動向を加味した多面・多彩的生産・販売体制がとられていることに注目したい。こうした前期商業資本的経営は船舶・港湾施設への投資、北国等との遠隔地貿易への開拓にも顕著に示されている。

第三には田儀櫻井家歴代当主とそのプロフイールが文献史料、考古資料、建造物、民俗資料等によって具体的に描出されたことを取り上げたい。とりわけ、櫻井家３代三郎左衛門直重、２代弥右衛門正信、４代宗兵衛清矩、10代多四郎直敬、11代運右衛門道順等の人物像には時代を生きる先駆者の風貌を彷彿させるものがある。

まずは、やや主観的ではあるが、以上の３点を調査概容のポイントとして示し大方の賢察をまちたい。

第２節　今後への課題

今次調査は、しばしば述べたように、期間が相当限定されていた。予想される調査項目に関して、最大限の成果が得られるよう委員と関係者を配置して臨んだところである。幸いにして委員各位の精力的で誠意に満ちた調査活動と成果の認め、関係者の私心無き尽力によって所期の成果は十分得られたと確信する。

個々の内容の要約は上記した通りである。これらの概要から今後の課題を提示するならば、およそ以下のようなことが上げられるのではないだろうか。

１）まずは、各分野において得られた成果を相互に点検仕合い、吟味して個々の事象の意義を確定し、田儀櫻井家史にきちんと位置づけることが必要であろう。

２）その上で分野毎の成果を交流して家史から地域史へ、鉄生産事業史から地域産業史の構築へと進むことが求められるのではないだろうか。こうした仕事の積み上げによって近世山陰地域史の豊かな描出が可能となり、同時に、近代産業資本家に転化する道を自ら閉さざるをえなかった田儀櫻井家、そこに映し出される日本の近代化前史とその特質が地域と共に語られうることとなるのであろう。

３）いずれにしても、今次調査では、鉄生産という具体的な産業に関する田儀櫻井家史のアウトラインを確かめ、その実態に考古学、文献史学、民俗学、建築学等の分野から迫り、究明の糸口を掴むことができたと自負する。今後は、これら諸分野に冶金学、地形学、地質学等の環境研究の諸学も加えて地域総合研究の実を上げていくことが必要と思われる。そうした諸研究の総合化に基づきながら地域の文化財保存・活用事業への積極的な取り組みが求められることになろう。

第40図　田儀櫻井家系譜

元祖　元和元（1615）年（六六歳）
塙団右衛門源直之

雲居（松島瑞巌寺の僧）

桜井家初代　承応元（1652）年（未詳）
桜井平兵衛直種

可部屋初代　延宝七（1679）年（六一歳）
三郎左衛門直重

宮本屋初代　貞享二（1685）年（三九歳）
幸左衛門直春

宮本屋二代　宝永五（1708）年（六〇歳）
弥右衛門正信

三代　正徳二（1712）年（三九歳）
三郎左衛門直且

四代　宝暦四（1754）年（四八歳）
宗兵衛清矩

五代養男　安永七（1778）年（三六歳）
甚三郎順之

六代養男　天明五（1785）年（五一歳）
幸左衛門義民

七代養男　寛政九（1797）年（二一歳）
伝十郎利之

八代養男　享和二（1802）年（三五歳）
録郎兵衛道明

九代養男　文化五（1808）年（五九歳）
祖左衛門

十代　天保九（1838）年（四四歳）
多四郎直敬

十一代　慶応四（1868）年（五三歳）
運右衛門直順

十二代　明治二六（1893）年（五四歳）
勝之助直明

以下、略

●本系図は、森山一止 2002「奥田儀宮本屋櫻井家文書目録」『古代文化研究』第10号、島根県古代文化センター　P94の付図を基に、鳥谷智文が加筆修正したものである。

SUMMARY

The Sakurai household in Tagi is a separate household of the Kabeya Sakurai family located in Ai village of Shimane prefecture's Nita county, known as one of the big three iron-working families in Inner Izumo. The Tagi Sakurai household operated an iron manufacturing business in inner Tagi-Miyamoto and Kuchitagi in Taki Town of Shimane prefecture's Hikawa county for about 250 years, from Kanei year 17 (1640) until Meiji year 21 (1888).

The Sakurai family didn't only involve themselves with ironworks, they are also recognized to have worked in land cultivation, road construction, and some public projects.

The Taki Town Board of Education took interest in this large hometown industry, and in Heisei year 15 (2003) commenced a 2-year long general study of the Sakurai family's iron manufacture. This study includes inquiries into the location, business structure, customs, stone remains, and literature of the ironworks, as well as a look into how the ironworks affected Taki as a whole. Also, since Showa year 58 (1983), there has been a detailed study of the relevant remains in Taki Town to determine the location of as many of the iron works plant's buildings as possible. There have been historical remains assumed to be connected with the Sakurai family found not only in Taki Town, but also in neighboring Ohda city, Koryo Town, and Sada town.. The current study has confirmed 16 locations where remains have been found within Taki. These items include remains from smelting, remains from blacksmithing and blacksmith training, and also building ruins. There have also been confirmed pieces of ceramics and porcelain and other manufacture-related items, which indicate prosperous iron manufacture in more recent times.

The literature study involves reviewing "Nennen miaichou", Tetsuzan shoumon shounikki", and many documents about the ancestry of the Sakurai family in order to produce a "Tagi Sakuraike tatara Seitetsukankei Nenpyou (A detailed chronology of the Sakurai family and the ironworks) " and to affirm the details of the achievements of the Sakurai family from the middle of the Edo period to the beginning of the Meiji period.

The emphasis of the above-mentioned investigation is to learn the truth about the actual affairs of the Sakurai family and the iron manufacture industry in Taki, and to examine the historical significance of the family in Taki.

These historical records and especially the ruins in the inner Tagi-Miyamoto district remain in very favorable condition. These remains include the Sakurai family cemetery and family temple, the thick stonewall at the back of the ruins of the Sakurai family main residence, Kanayago-shrine, the ruins of miners' dwellings, stone objects in the public cemetery, and the composition of the iron ore mines. From now it is essential that we quickly draft a practical plan for the conservation of these historical ruins. We will present the plan to the public, and we hope to convince the people of Taki Town of the advantages of preserving these ruins and to convince them of the relevance of this history to their own lives. (Paul Irwin)

報 告 書 抄 録

ふりがな	たぎさくらいけ たぎさくらいけのたたらせいてつにかんするきそちょうさほうこくしょ
書名	田儀櫻井家 田儀櫻井家のたたら製鉄に関する基礎調査報告書
執筆者名 （五十音順）	浅沼政誌・阿部智子・河瀬正利・相良英輔・田中義昭・鳥谷智文・仲野義文 西尾克己・原田敏照・松尾充晶・三原順子・和田嘉宥
刊行機関	多伎町教育委員会
所在地	〒699-0903　島根県簸川郡多伎町大字小田73　TEL0853-86-2853
発行年月日	平成16（2004）年８月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査
		市町村	遺跡番号	日本測地系による		年月日
宮本鍛冶屋跡 ほか	島根県簸川郡多伎町 大字奥田儀字宮本	32403	c-20	35° 13′ 58″	132° 37′ 04″	2003年11月 ～ 2004年３月

調査原因	学術調査				
所収遺跡跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮本鍛冶屋跡	生産遺跡 （製鉄）	近世～近代	櫻井家邸宅跡 智光院 金屋子神社 石垣群 墓塔群		発掘調査を伴わない総合調査

田 儀 櫻 井 家

田儀櫻井家のたたら製鉄に関する基礎調査報告書

平成 16(2004)年8月 31 日 発行

発 行　多伎町教育委員会
〒699-0903　島根県簸川郡多伎町大字小田73
TEL(0853)-86-2853

印 刷　㈱ 武　永　印　刷
出雲市江田町２０８－１